KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

今後行用ニ供ス
2901
1067
ル 3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9
JAPAN

門ル号1067

文化七年庚午秋開彫

旅行用心集

全

稲田小図書

自序

夫人々家業を勝る伊勢参宮を始とする
ことく甚重事ハ今更いふに及ハす
假令日ことに完爰彼よる至迄お抱抓到来
し一家内もそ支度とゝのひ扨いさよ起ものゝなし
扨朋友打洗ひ和の町そこまものそゝり
酒宴共催し旅中乃作法と思ふ事を
面々新切にいふる折ハ各皆喜ひて肝眼

よろこべる人のおほきものゝ
年ごとに四方より風こゝに
きほひあつまりて元旦いさましき物いなし
東國の人は伊勢よりわけて大和の大坂に國九州
とても名所舊跡神社佛閣を見まはし西國の
人は伊勢より江戸參宮兼ねて見物
松嶋象潟など見まはりさて京都に登り
扨また人は勿論

宮ぢ參宮を終りなどもろ〳〵我
郷國乃至かくきてとなるべや
扨また日ごとにまねばならぬ
為らさまざまの業を出ましてすゝ
あの稼ぎの業樂む事偏に神佛の教
ぎの盛んなるべし扨また生涯
扨人ごとに自ら指ゆびを
里ふとる自ら指ゆびを
山坂を歩り大山靈場

倩かる筵ふるまひされとも痛分なる
人のなる金銀財宝ほふなふとひろさるは
子壮健さるふ富貴ふ人の更に
学ぶそのざやも志のふ富貴ふ人の更に
貧賤ふくもそ分壮健にして業を精
出すことふよりさいつべし
扨ふりする人裁ふの昔むだきは
誰ふ為ならさる股引そ拵おこせ
ふらふそ夕ふ喰事おもんな叶ぬ

とを悩悪しくて吟ふと我ふの絶望ふ
知るし されど海ふ出ふ
者しのぬ塩梅ふ
我ふ為ふ人ふ為ふ
盛ふ風ふ
早朝ふ
の着き我縄ひ
生じ盛ふ
編地ふ

なふことの如きさへも我ら内まで業癌の
手当をするやうなるの妄執の報雑千
辛万苦言ふをそらばなく抱ハ老雪よ絶泊
り娘さいひ又誘ふを再「来」年ごとやや実の当初
親雑を志ずして峰打せぬ人ハ体な
抱ふ人ハ居故人情よ深く誘人ハ楽抱山の為よする
陰ありて人よ笑指さるることを久しう「既」一
大名公家よ共法方よりへどる聖強風国本生

河岡の外いろ式のお河をこれ出ありとなんて知ず
況や多人の抱りよ我修すべらんや抱ら世よの人
ま事雑を漫画ぐ人情ふ画ぐ人のよをよく
思ひやらぐ人よ抱人と抱ら抱之故よお雪ふよう
ふ除疑栄あんと現抱
をますぐ〳〵とそ教ハいするべし一ちまび金
ふ知る友人の妻抱りをぬんぐ〳〵の方ふ国〳〵枝成し
ふきとの抱ら抱ちする毎よこそ枝抱
とる抱へきふを包ら包彼迎めまし

なうぶを迄いくも年をへて老ぬ
又もや我ゝ廼ぞんのおひさき
幸〳〵たるを集そよふ又拙の筆まめなるき
くさ〳〵取出ふみ便〳〵おつらつら小冊を
なし其名を防むまに〳〵のさ〳〵むふ絖ひ
様にちりそめ〳〵旅り利ん集とや名
けくる気まと志この事
文化庚午六月

八隅蘆菴 景山

一東海道勝景里數
一五岳眞形之圖
一水腎用心之事
一寒國旅具并圖式
一山中狐狸猪狼防方之事
一船よ酔ざる時の方
一落馬ころる時の方
一道中泊りて蚤を避方
一湯氣にあつるころる時の方
一道中吹持せべき藥之事
一道中吹持せべき不の事
一木曽路勝景里數
一道中用心六十一ヶ條
一寒國旅行心得之事
一寒國ナテツキ之事
一船中用心四ヶ條
一駕籠よ酔ざる方
一毒虫を避方
一道中草臥ど直方并ニ妙藥
一道中吹持せべき藥之事
一道中日記ころめ方之事

春夢五十三驛
妖鴻七十二程

一日の出入之事
一月の出入之事
一日和見様并古欵諺
一旅立の欵
一大日本國正真縮圖
一諸國往來關所
一諸國道中附

○伊勢參宮道　○東海道
○江島鎌倉道　○大山參詣道　○秋葉鳳來寺　○名古屋中仙道　○宮ノ越ノ前道　○加賀信州道
○江ノ房総道　○甲州ノ富士道　○伊勢ノ田丸越　○大津ノ大坂道　○伏見ノ大坂下船　○大坂ノ紀州道
●白河ノ會津道　○會津ノ越後道　○水戸海道　○江戸ノ鹿島香取銚子道
○木曽路　○佐屋廻リ　○本坂越
○長崎船路　○小倉ノ薩ノ道
○兵庫ノ西國道　○乗掛リ秋田道　○秋田ノ津輕道　○外國之里數

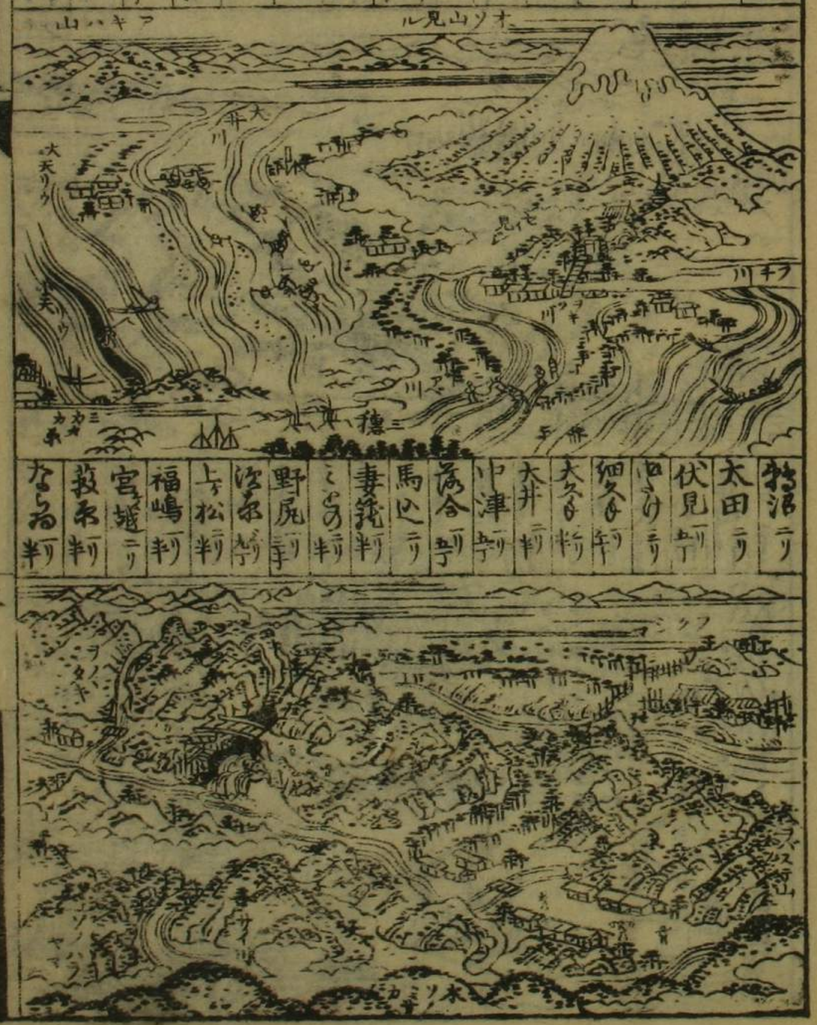
一年晝夜長短之事
一潮の盈虚之事
一旅行教訓之欵二十一首
一白澤之圖
一諸國温泉二百九十二ケ所
一西國秩父坂東觀音靈場

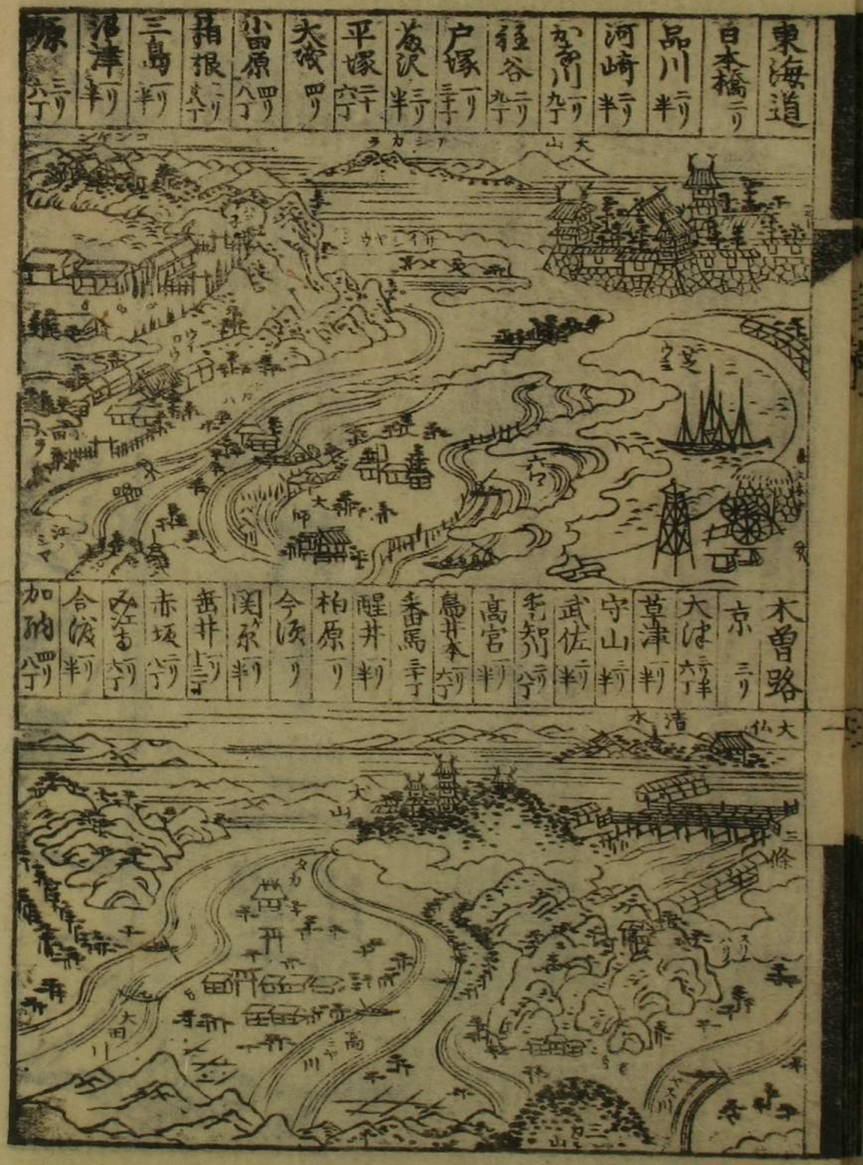
東海道
日本橋 二里
品川 二里半
河崎 二里半
神奈川 九十二里
程谷 九十二里
戸塚 二十三里
藤沢 二十三里半
平塚 二十四里
大磯 四里
小田原 四里八町
箱根 八十里
三島 十里半
沼津 十里半
原 二十四里

木曽路
京 三里
大津 六十三里半
草津 六十四里半
守山 六十五里半
武佐 六十六里半
柏原 六十七里半
高宮 六十八里半
鳥井本 六十九里
番馬 七十里
醒井 七十一里半
赤坂 七十二里
垂井上ノ宿 七十二里半
関ケ原 七十三里半
今須 七十四里
合渡 七十四里半
加納 七十五里八町

牧沼 三里
太田 三里
伏見 四十里
ひのや 四十一里
細久保 四十二里半
大久保 四十四里半
大井 四十五里半
中津 四十六里半
高合 四十七里
馬込 四十八里
妻籠 四十九里半
こまの 五十里半
野尻 五十一里半
上ノ松 五十二里半
福嶋 五十三里半
宮越 五十四里
薮原 五十四里半
ならわ 五十五里半

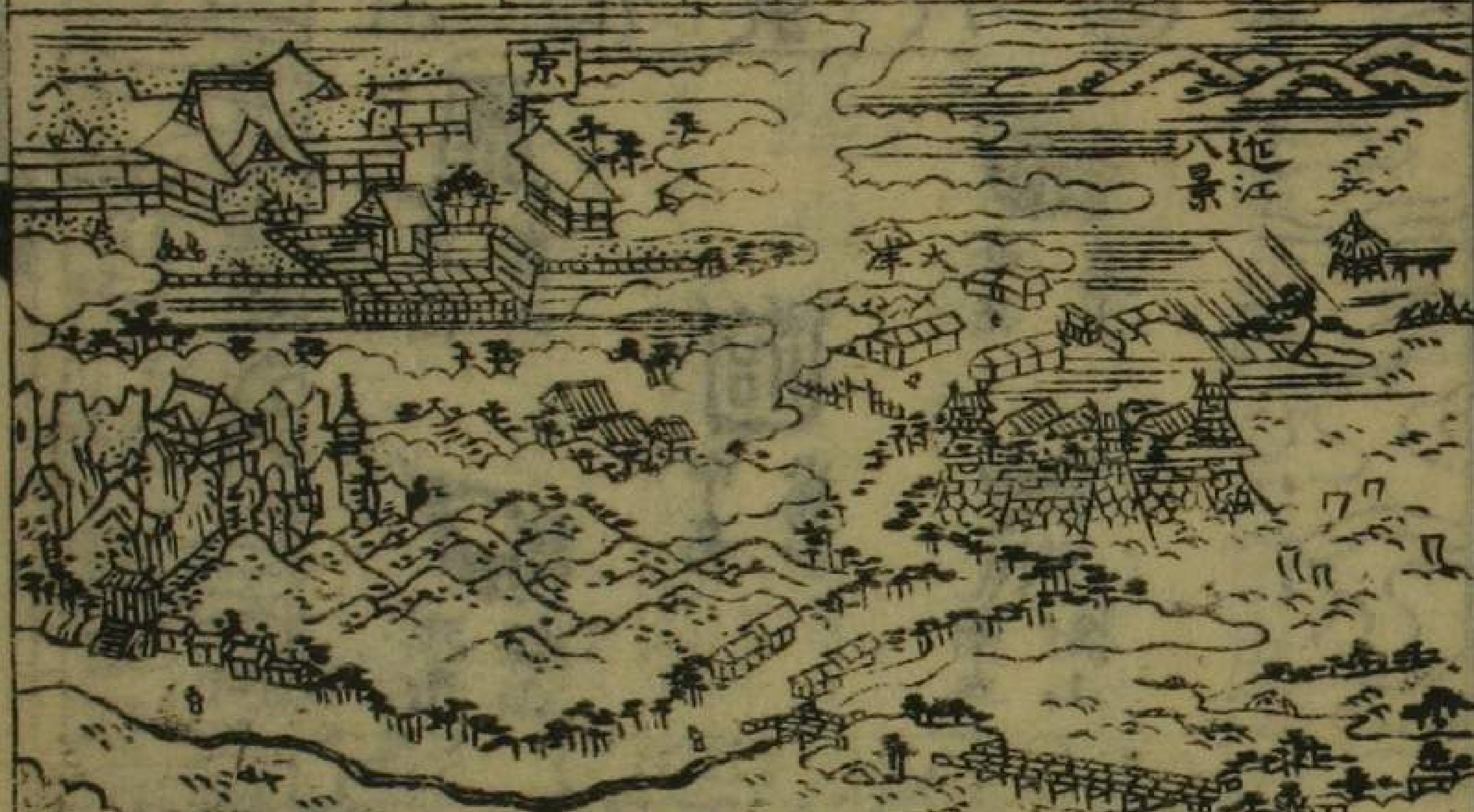
富原 二里半
蒲原 三里
由井 五十六町
興津 三十一里
江尻 七十七町
府中 十里半
まりこ 十二里
岡部 十九町
藁科 八十町
嶋田 一里
金谷 一里九町
日坂 一里九町
掛川 一里十七町
袋井 一里十七町半
見付 一里八町





浜松 二り三十丁
舞坂 海上一り
荒井 一り廿六丁
白すか 一り半十六丁
二川 一り半
吉田 り半四丁
御油 十六丁
赤坂 二り九丁
藤川 一り半
岡崎 三り三十丁
池鯉鮒 二り三十丁
鳴海 一り半
宮 海上七り
桑名 三り八丁
四日市 二り廿七丁

石薬師 二十七丁
庄野 二り
亀山 一り半
関 一り半
坂下 二り半
土山 二り半十丁
水口 三り十二丁
石部 三り半七丁
草津 三り半六丁
大津 三り
京都
凡行程
合百廿
四里半
十五丁



贄川 二り
本山 二十丁
洗馬 一り三十丁
塩尻 三り
下諏訪 五り八丁
和田 二り
長久保 一り半
芦田 一り八丁
望月 三十二丁
八わた 廿七丁
塩なだ 一り半
岩村田 一り七丁
小田井 一り十丁
追分 一り三丁
沓掛 一り五丁
軽井沢 二り半八丁
坂本 二り半
松井田 二り十丁
安中 三十丁

板鼻 二り十丁
高崎 一り十丁
倉ヶ野 一り半
新町 二り
本庄 二り九丁
深谷 二り十丁
熊谷 四り八丁
鴻巣 一り三十丁
桶川 一り半
上尾 二り八丁
大宮 一り十丁
浦和 一り半
わらび 二り八丁
板橋 二り
江戸日本橋
凡行程
合百三
十五里
十一丁

旅行用心集

道中用心六十一ヶ条

一 初て旅立の日は已を別て静に踏立そ鞋の加減お試能試甚二三日ゲ間を取て後に体已に痛ぬやうふさべし出立の前生ては人と心そやりくおのそび休むせず莫踏ものなり已を痛まそび始終のそんの種ぞまなるとそ夢々鬼角ぐづめい已を大切にすべき物慎中一足も打さべき物慎中物に外ぬ事おして一足も打さべき物慎中物に外ぬ事おして失念物おみやく却而煩

抱朴子云凡修道之士棲隱山谷須得五嶽真形圖佩之則魑魅精怪莫能近之昔漢武元年七夕西王母降於承華之殿進蟠桃命仙女董雙成許飛瓊等奏雲傚度歌曲而為武帝壽又以錦嚢書巻示之則此圖也故知五岳為萬地之尊其形天真則世人渡江航海隨身帯之可却風濤之儉必居淨處香花供養必降禎祥歴有奇驗可不敬哉

五岳ヲタヅトハ書經典ニ始リ和漢コレヲ尊信スルヒサシ世ノ人山坂河海ヲワタルニ此圖ヲ帯レハ風波ノ險難ヲ旦ク壽福ヲ祈ニ其奇驗アルニ本文ニテシルベキナリ

はきものなど

一駅舎へ到着して第一おそろ地の東西南北の方角を吟の完沢ふ雪隠裏表の口ふを見定置す古教すりそ

ホロの時のた免すり

一道中初くすす輩馬駕籠人足の用ひ雲丹

中に亭主のおひ〳〵教むべし相ひそへ生平

そてそのすうあつ性面ひろ人いろ〳〵する時右

ものく渡し教むる拠ひ何時出ちと胄

よろ方く中村其切限ふ産ひまふ程ふ

自起ふりやと灰屋不起起時いやと至

もるとこふ古夜をひ命〳〵その種ぐ〳〵年て

して脇よ向ふ〳〵さるのられば人馬の用ふも

自然と等閑よおりてくるれ教合ひ〳〵き

なわ旅ふていき神ふ祈ふ法城るさまば

ま四〳〵恐〳〵と知く〳〵

一牧いせ〳〵き坂おするの社前ものおれを胄ふ

よくれちく用ふ勇の人形残して風呂教よ包

れちさぬよふよん垂ひ床の中ふく

ぞくほとふる四〳〵兎袋い床の中ふく

〳〵せられど教おそ〳〵ぬるさ

朝のおそきハ一四の条
一 旅宿ハ定宿ハ勿論其道筋初而ハ
随意ならざれバ必ず旅人の泊る泊屋へ泊る
一 旅行ハ兎角暑寒残よく凌ぐ事ハ
専心肝要ニ候へ共人〻の脾胃ハ
食物残消化しがたく因而ハ
筍菌瓜西瓜餅強飯の類多く食ふ
ず又ハ食傷より重病乱ハ発し
及ふ事ハ裏秋ハ又ニ準じ知べし

清輔

一 大腹なるもの〳〵そらおそれいそぎ呑ふとのうず靜よく〳〵五拾吉後ふるまば心疲く居ながら飽食すれば却て氣を塞又は急病おこる物のまんほうべし

一 大腹ふる酒飲とのうず食ほふ呑べし尤葛氣とりよろしくつゝめ〳〵のむべし

一 そも〳〵まて焼酎を漫ふ飲べからず中ふる人まて上物のものあれどもよく〳〵呑べし尤夜のうち森ふる又は濕氣多き土地ふてい焼酎并ふ泡盛酒ふお〳〵飲ば濕毒をそふふるもの也秋冬

一 空腹ふ風呂へ入とのうべし食ほふゆてもよく腹拵を和らて入べし吉ものうず多勢よて汲の元ふ兎角風呂ふ入とのうべし尤風呂ふ入とのうねさぬ時は先白湯すべし白湯すべうず吉後ふはお茶湯ものまんほうべし

一 相應ふく風呂へ入のは奈何の事内次第ふよれども大抵五拾吉時はむつゝ出るものなれは

相おの捺すを見て又中より来る人おのづから
ば先ず我先へいまだ
よるを物いひ出すまでだ
にすまでだ外のまるものより抜い捨るを扣掠
一
疎のおそ欧まるる時玉拙逸居風呂へ
べし〳〵入ぞそのあと
べのべび赤を改めて
一通の抜まで抜
初まべのべび赤
てりのんとすれどいそきて赤通ずるより益

多きことみるものなり又河越おの赤舎あしきおそ
その砂敢あふだ〳〵
一そ中いと色悠をそ
里暑中いと尤憾じ
赤具〳〵濕を交
悟中しそ濕牙を
一夏ゐそ中いおく渇てみを飲ら清水
飲だ〳〵古池又い山みまそれよく澄流ざる
谷水ホ湯よ呑だのべび必ず毒あるものなり尤
五苓散の類を悟中しそみをのむだ〳〵

夏の原野よりする毒草毒虫出来多くなれば挙て数すべからず
鈔中蝮斑猫の大毒なること人皆知ところなり外諸虫の中無毒虫よりも形よく猛て毒あるものにおふ時は蛇蝮よりもをそるべしあるいは内虫毒蜂蟻虫蜘蛛虫蜈蚣の類ひ小至るまで

唐斑猫
色微黄
和斑猫
色こうこと

蜥蜴
和名色こうもり
石龍子
山龍子同物

閑なきことなり温熱の地ゟ暑濕別而甚しく毒草異虫も多き故人住れて山野に休むことを忌ふのんほある人きことなり毒虫ゟ毒草ゟ妙薬ホ出ることのごとくあり

蝮
又反鼻蛇
まむし
色黒黄なり種類多く大毒あり

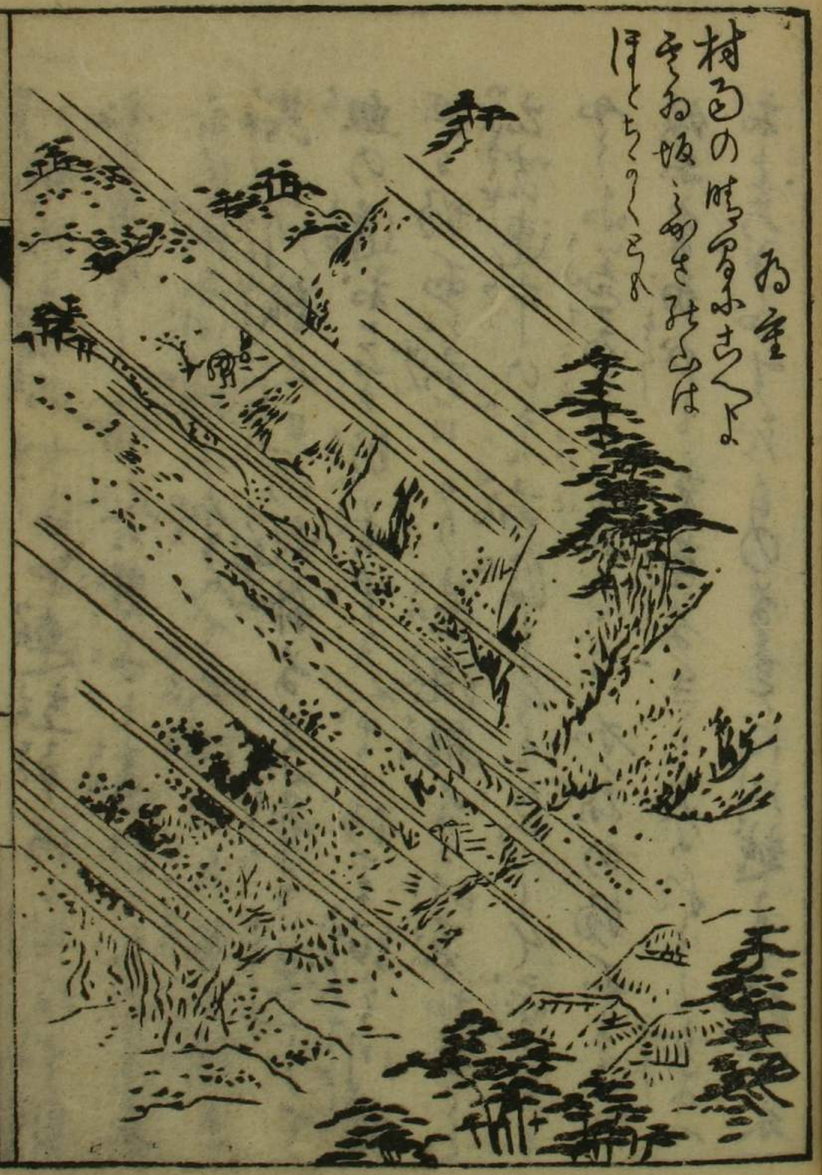
烏蛇

又は山椒胡椒の類いかんらび悟桐
山中の食をさまたげ濕気さるものの
まの葉の葉よりの
一夏い旅人疲果て道路より休或い草む
伏眠人おまどろし而せぬうち夜の暇よ
は毒虫多く 誤毒あるものに
害領あるほよ人死さ
とより旦古き宮寺の
堀おへそこより入或い
長休息さべし件のごとくする
きてめ〳〵害のなる
一食後ふそら残必ず急歩行すべし又馬駕
籠よ急ぶそして急まるお城しても飯の
如ふ氣塞ことの
一大小便ちけゆうる
なりび馬ホせば心を突殺死するの
一人馬の先艫出ひとこ
なりそをせんきもの

一武士荷ハ勿論商人荷ニ而も宿屋ニ而ハ無用ニ
先宿役ニ相預ケ駄賃帳を出し
問屋ニ到着の荷物の順次見定ニ而
ヤ渡ス事ニ又問屋ハ混雑の物ニ而失物
又ハ他人へ渡し
一武士ニ而も勿論乍人馬ニ而も大切なる主用ニ而
指リする人ニ而も馬方人足ニ不来ニ而
ハ叶ぬ事ニ而ハ勤務ニ関わる
ニ而ハ無之ニ付ケ様の事ニ而ハ
一
一定ニ而馬人足せん索いたすことニ
ハ無之ニ付ケ様の事ニ而ハ
悪敷なるものゆへ
ゆへぬものなり
おゝえ〳〵小附お立ニ
銭小附の数を改ニ
附の高銭の中へ
紙ニて二重ニ包ニ

急ニ指リする時ニ而ハ主用ニ而ハ
一定ニ而馬人足ニ而ハ
悪敷なるものゆへ
ゆへぬものなり
おゝえ〳〵小附お立ニ
銭小附の数を改ニ
附の高銭の中へ
紙ニて二重ニ包ニ

造(つく)り河越(かわごえ)の話(はなし)有(ある)のさうりの高(たか)き浪(なみ)すす
用(よう)ゐすべし　越(こし)川越(かわごえ)の物(もの)おもしろいぬやう
物(もの)なるべきさうり附(つけ)ようの
作(つく)る重陰(ちょういん)お駿河(するが)の産(さん)なるべく
一(いち)指先(さきさき)のそろへぬ川(かわ)かちうし
又(また)生(しょう)あるやうに橋(はし)を渉(わた)しかちうし船渡(ふなわた)しある
ぬくもりかたの物(もの)おいお役(やく)へ立(たち)合(あい)
自(じ)らお気(き)のすべし　詰(つま)るお役(やく)へ立合(たちあい)
行(ゆく)ものなり



村(むら)の時雨(しぐれ)ふきくよ
そる枝(えだ)こずみ山(やま)は
ほとちのくらし

一川越ゐる坂下女なを連立つゐの時はを約
ゐ者ども婦人ハ男ゐと遣ひうちだゐる気
ものゝ扱ひ川端ゐをんで大河のみ勢ゐ怖き
其上川越人ども乱雑ゐるゐ者ゐき逆上して
血の道おこゐ難儀すゐ人ゐまゐ坂下ゐより川越
ゐる坂下ゐいまゐ甚混雑ゐる比第をちくと
云哉連中の者ゐハ坂下ゐとんだ
やうゐゐる者心得置ども女ハ
役ゐ者ゐかも筆をおきことなれども女ハ
おとゝきゐすたゐものゐまゐは川越ゐ浪ず水

飲ゐ者ゐ山坂おゐ歩ゐ嶮岨ゐる下ハおこゐとか
云哉置ゐ肝要ゐり
一川越又ハ船渡しゐ坂下ゐとゝ面ゝ怪我坂を
ゐ者ゐ上ゐ者ども且駕籠のうちゝ約置ゐ者の
ゐるとゝ下ゐ者へゐの技ゐゐるさ
きものゐり
一渡坂ゐて荷ゐ者ハ馬を雇ゐ坂下ゐ者ゐ馬
馬技先ゝ荷ゐ人ハはゐよゐと荷ゐ人先ゝのれべ
馬物をゐて荷ゐ者ゐゐくゐ者ゐ荷ゐ者ゐ
怪我おゐものゐ也老人女ゐの者ハゐるを入ゐ

一 舟には必ず乗合のこと
急ぎなりとて舟路を行んとするあらば
要用にていそぎならぬ事ならば旅人
陸地を通るべし 由なき事あれとて船路
をとり足をやすめ思の外に追風よくして益ある
事も有ども若違変ある時は後悔先に立
ざるを知るべし 船中の用心は前にくわしくあり
一 出水の河は縦へ小川にても軽んじ渡る
べからず 出水には格別水勢強く種々のものを流し
来る故に怪我あるものなり 又山中国に行家

川は常は涸れて小さく見ゆるとも雪解又は
夏日山奥にて夕立あれば俄に河水増りて忽ち盈る
時ぞ常も少しの川も広くなる故に土橋は流され
ぬ事あり 同所の内半里東る所に仮橋或
多からず毎日出水にて流るゝ之則ち東海道
の酒匂川奥州の白河大田原の川などの類の
ごとき山国の川にて雪解の頃は渡し場
水の折からわかちわかちは勿論水中の石なども仮橋
を渡るべからず出水にて橋杭抜上り甚く
浮あがりある橋を渡りて流されたる人あり

一 霖雨降つゞきたるあとのわけハ山欠落かゝることま
まゝあることゆへ加様の折ハ山峠の大巌石ホ有所ハ
其泊屋又ハ川岸ホ近き家居なとに泊るべからず
是等ハ斟酌有べき事なり

一 道中にて人馬の賃銭并宿銭ホ連中にて
も其度々面々の出しあひハ手間取ゆへ
よの銭の世話をなす人ハ當座に立替置
其日の泊りにて算用すべし 若連中にてハ
日記帳に志るし置べし 後にて[illegible]の事
雑きめのなり用にて等閑にせぬ事なり

一 道中にて出銭ハ三百文又ハ五百文程連中にてわり
其人信實なるとても同前し 出銭ハ食物并
又薬ホ至るまでのことゆゑ路次にて出すべきなり

一 道中にて馬おきさ人駄荷ハ何ゝ人にても連に
なり縦知人にても風呂敷包ホ其馬に頼むべか
らず 道中にて急に入用何にても他人
ゟかるにおよぶ事あるものなり皆人を
中へ出しては我荷物を[illegible]に持人にかさぬやう
になすべき事也

一 道連ハたゞ一人か二人に限るべし 大勢連ハ悪し

一道連にもやまひ起り
顛癇病喘鼻病或いつよき拍
いの時も疾發することあるなり
一毛布踏金或和拍するものは胴肱布も入貯ふべ
一日ニ五六入用い悔ふべし
尤小出まるゆは拍
すべし人の見ぬ

一 泊りまりて刀脇差を自分寝る床の下に入おく
べし鑓長刀なども床の奥へおくべし
一 其宿中火の用心随分大切に心付村中ハ勿論隣村
野中にても煙草吹から粗末に捨べからず尤
休みて又宿合羽なとの火にて衣類包物など焼を
河原など念入べき事なり
一 雲の中或は野山路にて雑木焼を何の法野火風
烈き時ハ者しかるべし中広くなる所のぬれ此所を
通りかゝる折ハ其所のおもむきを考べし本道まて
も火の元の事とあり野火など油断なるべからず

一 道端の家居又ハ畑の中なとに梨柿柚蜜柑
すべて菓物見るとも他所のものを戯にも手出
しせぬ事なり又村中にて五穀ハ勿論地
中に干置物并拾物なとも踏べからず他国にて
物いひなとにても是非の論立かたしと知べし
一 山中或ハ野道なとにて男女草刈童又ハ女連
子持集りにてもあひさへ一通りの問言ハ格別
其国の土地ハ田舎詞なと誘りて笑ふなと
べからず聊の事より恨をむすび出来るものなり
遺恨あるべし

一間の有又い模範すてあ〳〵き旅なく泊里
阿るいん特西安ものの通り然とも不自由我口
外よ出さすあるやうふ物いひ荷物と人を
お用心さるの笑ひ和ふその秘事さり
一皆人他國へ出ませば物いひ風俗いろ〳〵ふ替て
已ゞ國言葉よ書ふなくよの通る人なのきぬ本は
おう〳〵とやふさ書ふ必然さ通りまうるをんほらこのひしく
他國の風俗ものひお笑さのふること誤とまうざ
〳〵人の初至安物さと口論となるものと

一そも〳〵ふうく謹小ふうこ御瑠璃ホロすはうく
りを出ますよの通り踊うふをうず元も口論の
場なりとまうざ
一そも〳〵ふて古ふの又ものい喧嘩口論博奕碁
将棊村踊村角力變死人敷生場処而人立多不
ホ元斗ひあうざ
一高ひ筋なふて外用又い湯治先物集或ハ河留
おふて出逗留すうこのふび旦自分の知る高ひふくや
改而すうこのふび旦自分の知る高ひふくや
も出せぬとまり利延より事起里災ひを

生ずる大抵は悩むときなり

一湯治場は硫黄の氣多く故大小の身差支ホさぬ錆るものなり其用心肝要なり

一主用或は要用ありて初て旅行する人僅の不足を思ひそれを名残惜く跡ホ尋ぬるは旦ちぬ

一旅行ありて出火の時其外火事立

きよりて風すゝを又斗ひ荷物おひそれ出

るなり尤多き時は一ツ宛持隣りのお

若い衆へ預けを有持隣りのお

お孫の守をたよりせぬ事

一旅は相方を用心するものなれども第一は戸締

をなす又看よりも相宿を探す様致べし

為酒乱狂氣ホの人あれば相方ホて喧嘩

相方ホて大酒宴ぶまつ為酒交さを

一相方の中

止ぬ猿などの連中まで酒宴のすむまでかくるく一人ついて不寝の番をつとめ長酒のうちも
むつかしき事也

一馬に乗るき勝手のあるおろきそのとき出時の支度して死人ごとの荷物を立附居り荷物曲り地へ付ぬ様をよく合下べし〳〵ろくへ旅中はかならず怪我すべきものなり

一三月廿五日まで田をうるふ事なかれ田をうるふ日〳〵不使休めたきもの也

一馬子ども老人小児いたわるべきこと

一夏中馬に付蚤虻あぶなどおひ〳〵馬子又ハ人も眠ずまに付くあぶなし〳〵団扇にて山坂河端おゐて心付べし

一其年まで相応の本百姓まで業種物業おのく其種を蒔ること勿論にて其むねを以年年其年まで入用あらそへ

一飛脚其荷を持人種重きをいとふ容易

ざる役ありて書状や金銀よりも手きてとゝみくれ万一主人の要用を欠のごとならず大事をゝくよりすてゝそのまゝばんりあるべきことそのり

一そも〳〵ざこの大小拵く短き戦場もかなくて刀長脇差又ハ団扇の表具風の表具をもつて用向へつかハされ候事

一百連ゆ小荷並雇人へおい出立のお荷をほよせ先そのまゝ病死おゝ荷いの拵やうよ江四通りあり万一主人そのまゝ病死の節は

白屋并ニ湯壺ハ右ヨリ左ヘ一礼ヲ莫ヒ社置ナキ
附ク事一人抱ノ囲國スル堂ハ寺號又ハ本尊
ベキヨリ多クハ入ルヘキ人ノ多キヲ
ノナリト知ラ
一ヲ乗テ四蝕アリ体ニ全蝕スル
歩リスベ月ニモ同様アリ
一道中ニテ神社佛閣ハ勿論橋ニ立木又ハ大石ヘ
ヲ并ニ張札ヲ改ノ為ニ立ルヲハ此ニ記ス

水替用心之事

一皆人他國ヘ出ルヘキ七日ノ内ニ水ヲ替ル事
ヘシ尤ノ外ニ
魔ヲ拵ヘ置ノ外ニ
ヲ入ル事ナカレ
吸ヒ取ルヘキ
ヘキヨリハ
ヨヨリ湯ヲ
ニ至ラバ
ヲ食ハ
ヲ放ス時ハ

同姓よろめし　いとへども甚國和の氣候ハ
一月と二月と左則深ぬるは必び姉ハ通理
すりも甲男人の内のぐきとるり院ま奥ふの
時候と京大坂より西國九州の至ば又
おこ小國越後奥羽の相違ありそ姉のはハ淺黄ふおよなんとは名
をも開状おのお連生をもいて指そのうぐ
國ハ中ぐ寺ま甲里國ふ内ハ晴國ふ人ハ空
空國ふのよ暗ふへりてハ中ふと稱ふ古昔八丈
の人大勢江戸へ来り居く瘡瘡麻疹ふ法行

まあひ疑發死しる
廻せざる故すべし
紗の上着甚ふの如
浪起居おのを以大
よきかとの業ハまよ

寒國旅行心得之事

一奥羽小城の旅行ハ飯銭もくもむるよの志
く男ハおまふ國ハ九月の末よの里ハ雪ふり
十月奥海ハより陸雪ハ地よふはりく
山上曉野のそ眺を埋く具ふ雪の香ハ多く

粉雪ふくふぬ四ツそる風よ吹ちられく雪吹
のめ〳〵況やほ四ツ勿つよ一ニ人つるゝ峯附
のこゝ〳〵ゆ〳〵そ路人路の四あてよこそ
公用の人い雪踏人呂をみて出〳〵をあ四き
すれど〳〵峯の旅人はそれもなく〳〵道四のへき
人も種より跡ふそをえう〳〵ふひてかをふ
出ることあ〳〵ずして連よ人やまあ二百四雪
如此旅を艸上ニ戸ふりさて大酒呉〳〵すべ
うす古酒すれい分遣〳〵て雪穴球すそも
せぬ〳〵地ふそれどる山里の油雪そ路い勿

論田も畑もなく一面の平地とする也醉狸の
元まゐて方角をそひ浴き漆垣ふへく
跡ふこゝえ死人多し教飯行〳〵
昨て去按ふふ〳〵ぬ雪ふ魚をし去按ふれだ
歳宅ふ冒れく神竜氣力を吉果〳〵ふる雪
吟ふあひ絶倒ふる事ふ何ふ酒ふ醒ざれふ
たゝひ雪吟ふまて一和をぬすふも食に
なふすなし裏吟ふあて空
死する人多く上戸ふて大醒のよふるゆ酒まり

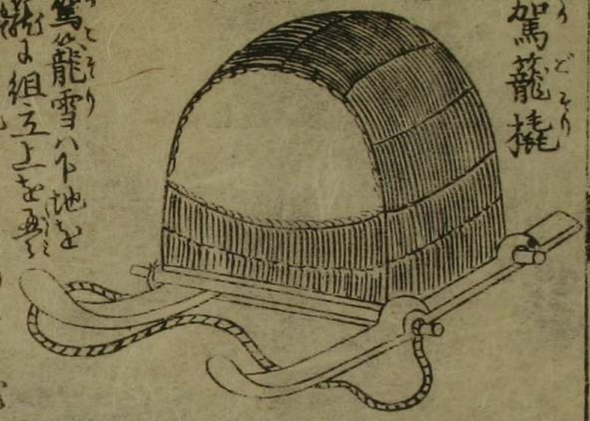
一雪吹あらしたる人ここへ来りて休息
みの気分あしく火を焚初めいまだ火も
人を風呂へ入るをも初めいまだ温むべくもみえる
よ勢くすべし火をたゝき初めいまだ温まぬ内
時は逆上して寒ぐことあり

寒國旅人并に國式之事

一雪中旅人の紙衣胴巻或は皮衣のもの
下着ふの事西国の雪国の雪ときと
違雪の降きとい事

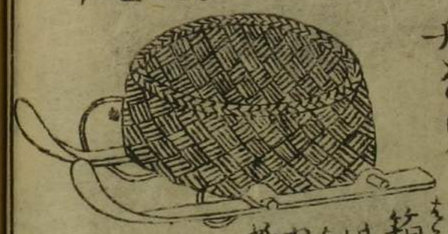
駕籠擔

駕籠雪の下地を能く組立上を菰にて包ゝるものゝ如し常の雪車と違ひ附ゐる中より刀のみもあり又ふとんなどを入れる道具ホヘうそ常ゝ駕籠のやう〳〵医者などゝ共を用ゆ



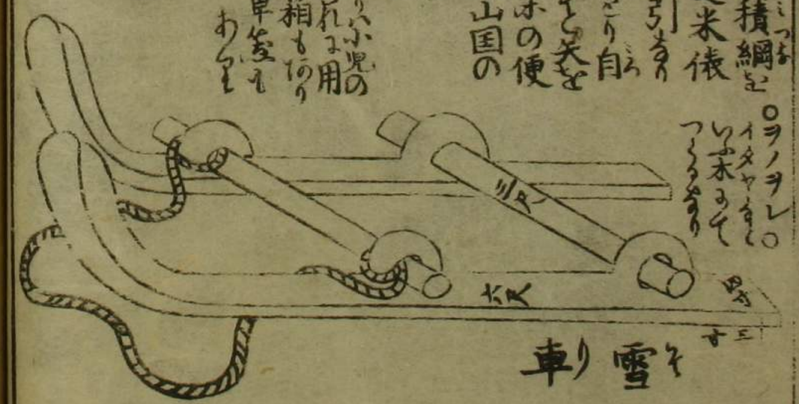
雪車

雪車ハ勿論荷物或積綱などを肩へかけて一人ゟ引ハ米俵五六俵ヨリ十七八俵ゟ引ハ山坂ハ荷杖もて揚ゐ東あづまの〳〵小ぞりと共を牛馬車ホの便利ふ十倍せり越ふ山国のつくりぞり



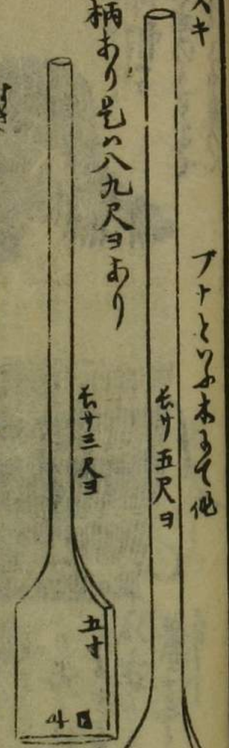
箱橇

箱ぞりハ小児のたゝらもれよ用かゝ箱もあり勢圖草紙もあり



雪車

外ニ長柄あり　長サ五尺ヨ



長サ三尺ヨ　五寸　ハヽヨ

雪踏

藁まて作りあんのそれめく表豆〳〵き雪のふる夜〳〵あれおの并に通路の雪をあらかじめけすまれ通路をつくるに忽ち又来のとき便利用ゐもあり

同上

細ハ雪を屋根ゟおろし又ハこの笹をもつてきり町の中をハき向ふの人くぬ斗りよつこよ。又小児外まて戯まはるゝ雪有ゟもの也。

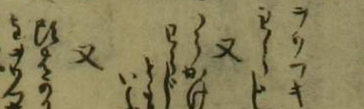
兜頭巾
長範頭
ともいふ
木綿にて作る

木綿帽子
毛いたのごとくして製しかぶりもの

藁笠

藁沓
藁にてつくり
雨雪ともに
用ゆ

藁すぐき
これハやく紅
をよりてものなり又
浦そぐきも
あり味
ともにやはらかにして
藁ほそくあむなり



ワリフキ
又
ヒラクツ
又

モコモ

雪吹をふせぐもの

源兵衛
藁にてあむ
いくさ沓ともいふ

同上

ひらくつ

木綿たび
毛いたのごとくしたるたび
織ものにて下地
のごとくあむ
これをたく

草履下駄

竹ノ皮下駄

樏

樏

草履下駄

竹ノ皮下駄

樏

ゟ山路に往生するものゝ中へ押分られ
て遂に死するものまゝあるを時々あるものゝいふとも
情なくべきものゝすゝみ出て笑ひ
省てを早速其雪戒屬穿て死骸を求ること
何ぞそれ夏ゟ秋て雪の消るを待外ゟ最も
かゝる事を注意するものゝ主用要用のまゝ
此時をあぐみ暖を考へ其土地のものゝ指ゟを
見ゟ重ゝ一ツも安心ゟせぬやう
教ゟゟ既ゟ舎注ゟ越後へ又上州

よゟて三國ゞ峠ゟ山中ゟ行ゟて
遂て死するものゝ石塔あり

山中ゟて狐狸猪狼の類近付ゟる方

一深山野原の道を注意するものゝ一人
吐息ゟするゟえ熊狼の類分をかゝるゟ一人
拵ゟていゝ人拳なきゟふ道場ゟるゟ仕居ゟる
獣ゟ同ゟゟゟて人ゟ噛ゟて人ゟ噛ゟて
往ゟの向ゟ行ゟふゟゟゟゟゟゟゟゟ
ふゟゟゟ拵ゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
きゟゟ注意ゟするゟ彩ゟ弁拵の先を割ゟゟゟ叩き

音をして歩りまわらしむ又石突の柱をは
きてもの〳〵さそれなど魚獣魚去之又夜そは
火縄松明おそれおり魚獣魚雑す〳〵又牛馬の
毒蛇そ蝮のごとくぬそこをりへ魚獣共
蛇虫のもの毒虫おおそれをふせんといよ

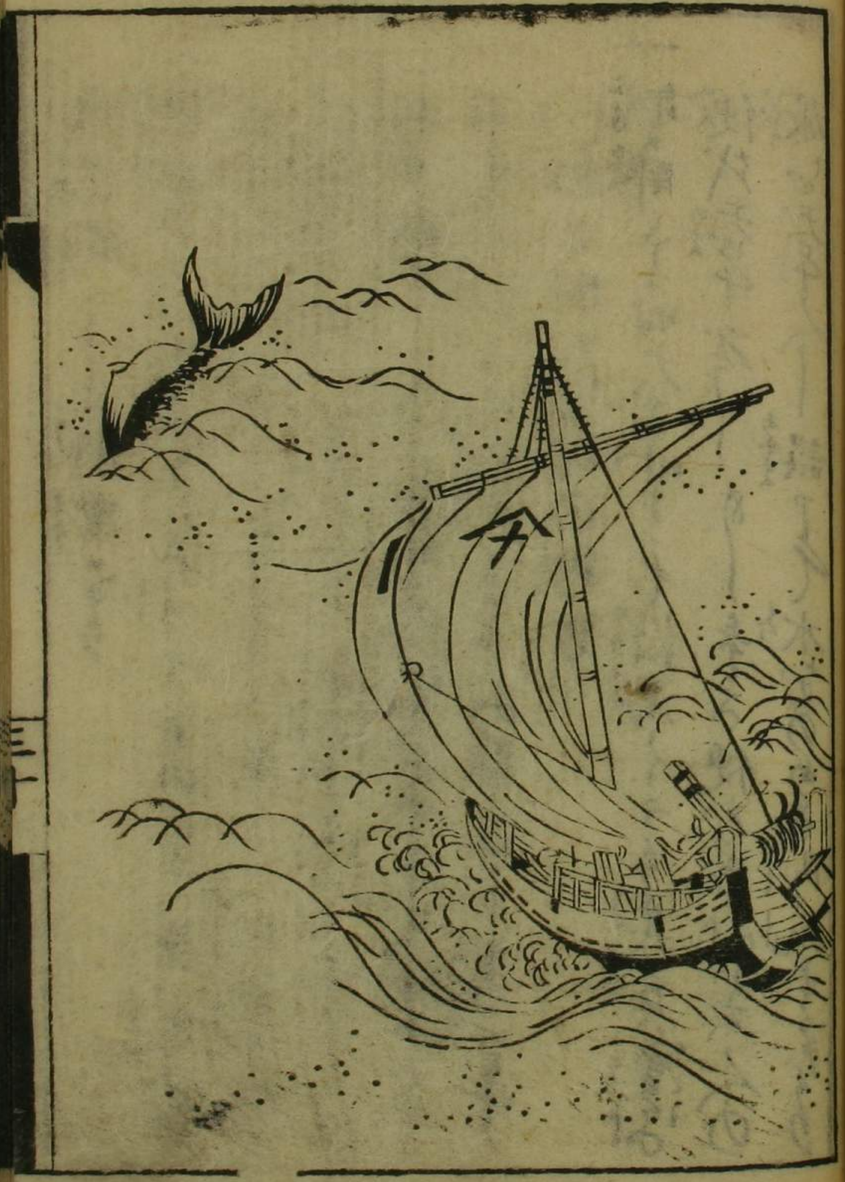
一五岳白澤は両岡或は牡牛すれば旅中の災難をも
免まき魚鬼猛獣そ辟ることあるそん

一狐狸の和らそて勿ちそをそひ或は害をおと
なし或は川まきおよ〳〵或は鎖の鍵の如き種〳〵の奇怪をなすことあり

ざる心我意たぐそとなり乱れ体ひれ〳〵そ
元まるそを考ふるそ魚獣ともよろこぬすれば
ものそを立度そんこの極すれ狐狸ともなし
都而心我意をふるらんふとそ中の〳〵ふかき
肝要のすなり

船中用心之事

一船ふ奈たるものは先〳〵船中の諸そを按等
の都省我意をは置べき之為大風或は早
風あり〳〵船くらんとする時そ按ん竿の



たくひよそもおつこそ舟へ入ぬ　ぬれすれば
残ろくぬ人も沈まぬ少しを助るし
一海のようのく大奥のお船へ附纏ふとあやまち告
は不審るしそ舟人ハ我かし〳〵　拔えみは
音あるものを叩立まそ奥船迎まするり
一舟の漂ふそ雑まき　あれば俄ま巫雲海ようふ
あまくくまと波漂ふ大渦をまき海上勢拔
まるとなりそのれ舟ハ引込んあるとあれを
名霊るしそ拔るのれ仕にのおつのそしおも迎まするが
しさそくまば波の渦巻ふまるなりまるま船

一 船に乗時は陸の土をおく〳〵紙に包み脇のうへ
あてゝをれば船中すれど悪き酔とゞめず

一 硫黄紙を包み悪き酔すれど悪き酔とゞめず

一 又方付子を二三枚人参少しせんじ悪き酔とゞめず

一 又方はよき醋一口飲てより又梅干一ツ含てよし

一 又生大根のしぼり汁を呑てもよし

一 はなはだ酔嘔吐甚しき時の半夏陳皮茯苓の

一 舟に乗時に至り河のみを一口呑むべし船よく酔ぬ心

一 船に乗時は陸の土をおく〳〵紙に包み脇のうへ
あてゝをれば船中すれど悪き酔とゞめず

一 硫黄紙を包み悪き酔すれど悪き酔とゞめず

一 又方付子を二三枚人参少しせんじ悪き酔とゞめず

一 又方はよき醋一口飲てより又梅干一ツ含てよし

一 又生大根のしぼり汁を呑てもよし

一 はなはだ酔嘔吐甚しき時の半夏陳皮茯苓の

一 残薬ぬくると肝要なり

一 便船の人数多のとき第一番に乗べし船中狭き心又船ゆれるときは立るもの多くして船中のすいの所なし

○船よく酔たる時のぬき方

一 船に酔たる時大なる吐して後渇くなり其ときなま便を呑べし小人の尿を呑べし誤て水をのめば即死するなり

三味をおかせんじ飲てよし

○駕籠よる酔さます方

一かごに酔人いる紙のとを開て茶をのみ

一南天の葉枝ながら紙のうちふき出すをかんで茶にのみ

もどすよし酔ざめとなる

一若頭痛甚しくむかつきもどす時は熱湯に生姜のしぼりかけを入きます飲すぐ

一女子馬かごよる時いきなり冷水をもち跣細末をそうつをまねて茶をのむ

○荷馬車よる時の心得方

一荷馬車よる時は前後を能く見るべし

一藁ぐつにて泥ぬかるみ或は唾よる血交よる歩る時は

藤の粉を酒にて用ゆべし又蓮の葉を細末

にして湯にて呑てもよし又腰より足までそれは

よく打血のさしこみをきいて跌打ち和らぐ早

速外科我にて出血をとめるべし

一其上一道寺弓さきの馬の汗を大毒之食物之目をくらぬ様すべし

○毒虫我ける方

一紙匂ひ袋を悪水すれば又乾姜と雄黄を細末にして悪水にてすり

一龍脳麝香樟

脳の悪香氣たのきるの妙也

○道中泊屋にて蚤を逐ふ方

一苦參といふ草残生のまゝにて森安きものに二へ
置ハ蚤よりぬなり最上草也よくあるもの
なれどもすくなし此ものを入る
圓キ事ハ前のごとし

一枳一ツ拍わり抱き寝れば蚤よりまず

一又棘藜を乾し床のしきよく安てよし

一又方枳實を沢山せんじ其ゆをよく打
其湯にてまた蚤よりぬなり

苦參 和名 一名 土槐

山野に多く葉ハ槐のごとく花ハ赤小豆のごとし
根黄白色なりて至てふとし

莖ものびて
よく蚤を去る
とぶ

春苗を生し
高サ五六尺に
直立して夏花
ひらきて秋に
至て枯

○道中にて急に腰を直す秘伝并奇方

一そも〳〵茶屋にて休むに若そ輙のまゝそこを仆腰痛みてのらずそも時いかゝせんと思ひ煩ふ事も多かり草臥直るとて休むべし

一旅なれぬ人〳〵ひま又いとまを惜歩すハそも輙のそきやう雑相するもの〳〵独そ輙を覚ぬ様にてよく〳〵おそく〳〵時も不覚のびたまりなきやうにそく〳〵と又ゐ乾き熱せる故ゆ痛こまりまめも出来るより困ゐ〳〵そ輙を解ゐ

の物をそまし〳〵多かり〳〵そも休むべし

一そも腰ゐ痛する時いかゝと思ひ煩ふ事多かり〳〵ゐの〳〵そこをそ腰ゐ痛する時は風呂へ入て後焼酎和ゐの三里よりそ上ゐのそこを灸べし〳〵多かりそ

てくきこのぬるり

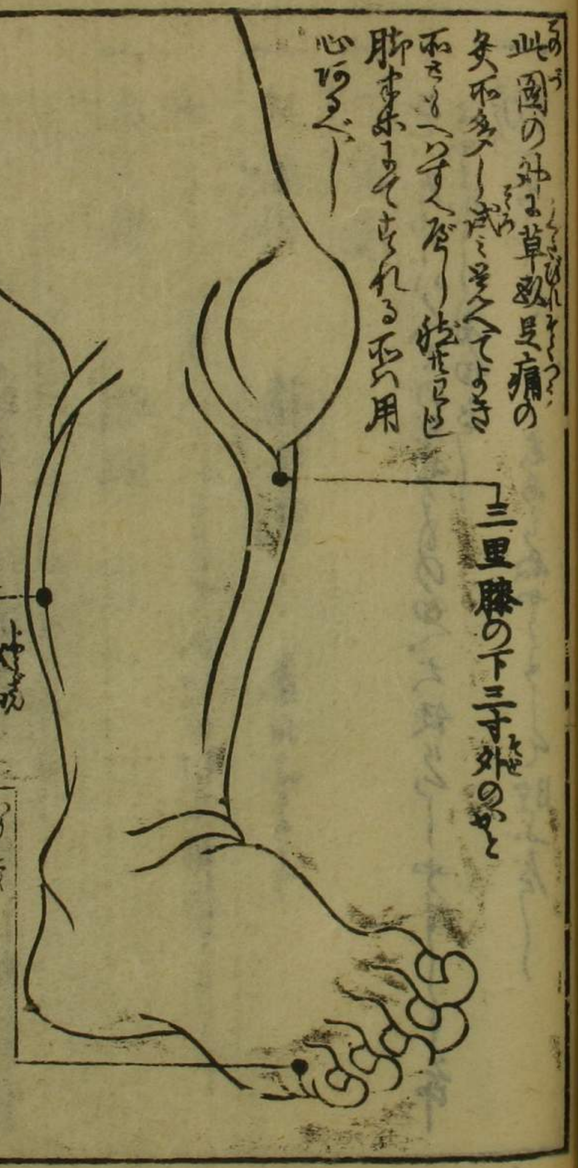
一圭路ゐして足のつま心ふすび腫痛まは蚯蚓を泥のまゝすりたゝきてよし〳〵

一そも腰ゐたゝ時ゐの三里承山通谷の三ヶ所灸すべし〳〵

ゐ風あせ入る時
一已のうへかすめ紙漬出し
未をそゝひのまま押せぬりそよ
一又方煙草の吸がら紙そゝひ押交ぜ火そ
ほふりてよし
一又方藥種屋にて唐の土とふ物を硯にて磨き
そゝいのまますべぬりそよし
一又方木綿糸へ針を通し糸へ矢立の墨紙
漬出しぬりまめ紙横よつきぬき歩行て墨まめ
のうらをおさへ痛み止るとぬぐなり

一又方うんの粉をぬりそよし
一夏の蚊よけ已のうへ猫の
をもりそのまゝ汁紙ぬりそよし
一夏の蚊よけ笠ぬりへ桃の葉紙入かむまゝ
紙うらをぬる
一毎朝胡椒を一二粒つゝ猫せそ夏重ね紙せび冬
は雪吹まあふとよし
一夏水飲時胡椒一粒を噛てのむとよし
一毒虫にさゝれて延齢丹まそゝ蕪香圓よ

てうぬまつぶ　　お生
一田螺を醤油つけ焼乾盪て搗爛く
二三の内利目れたるをあくるとそ
○湯氣ふたのうへたる時の奇方
一風呂へ入て時分移し湯氣に中りたるは
冷水をそゝ面へふきくだし
眩暈甚しきものいや惣身に水玉流のみてよし
一又方面へ水を噴うけて愛玩解あくび
嘗ろんをすゝめ氣の有をぬく又酢をかゞ
飲ませもろ



○道中所持せざる藥の事

一熊膽　奇應丸　返魂丹

已上三方は積又は腹痛食傷霍乱よう〳〵此外ざっあひの薬いろ〳〵あれども此三方あらばたりぬべし

一五苓散　胡椒

水ようよう又は夏ざっかきて水をのむ時用ひてよし

一延齢丹　藏香圓

氣付ぐすり

一三黄湯

是は吐血又は鼻血のみならず大便より血下る時も用ゆるなり大方は先ず大黄丹まで吐瀉あるものゝ

一油藥　白龍膏　梅花香

此外手疵流布する朝川の挂花香ぐすり　切疵腫物毒虫のさしたるふう〳〵

右の外いろ〳〵のおひ薬有物なれど猶くはしき事は又巻をあらためてしるすべし

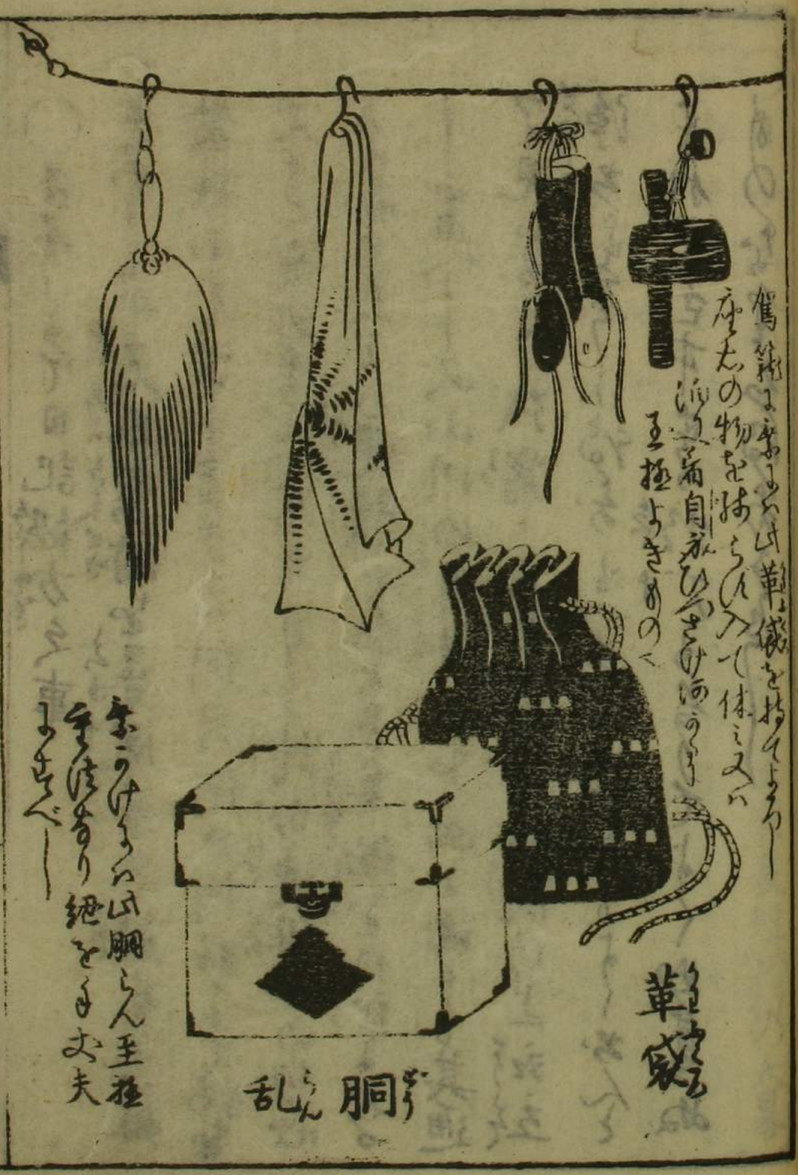
一備急圓

大食傷まて吐瀉〳〵せざる時は用ゆるなり

熊のお奇應丸返魂丹まて吐瀉あるものゝ

○乙卯一双持せざる不の事

一矢立　糸針　扇子　懐中鏡



日記帳 一冊

但シかみそりハ泊番ニてかり用ひ又ハ御関所抔不通ニ付ひんのそくまざるなり

一 挑灯 ろうそく

大おそく 悟本付木

先ハたゞこゝを呑ぬ人も悟本付木ハまきつるものゆゑ用ゆべし

一 麻綱 先ハ泊ニて物ゝをひかくるまとふよきものゝ

一 印板 先ハ家内へ一ツ宛鑑を置しるし金銀のゐ替ゆゑ其印を用ゆるの念なり

一 櫛 先ハ髪 髪付油

○日の出入の事

正	十節	卯ノ八分ニ出	酉ノ二分ニ入
正	九節	卯ノ七分ニ出	酉ノ三分ニ入
二	九節	卯ノ六分ニ出	酉ノ四分ニ入
二	八節	卯ノ五分ニ出	酉ノ五分ニ入
三	八節	卯ノ四分ニ出	酉ノ六分ニ入
三	七節	卯ノ三分ニ出	酉ノ七分ニ入
四	七節	卯ノ二分ニ出	酉ノ八分ニ入
四	六節	卯ノ一分ニ出	酉ノ九分ニ入
五	六節	卯ノ時ニ出	戌ノ時ニ入
五	中	寅ノ九分ニ出	戌ノ一分ニ入
十	十一中	卯ノ九分ニ出	酉ノ一分ニ入
十	十二節	辰ノ時ニ出	酉ノ時ニ入
十	一中	辰ノ一分ニ出	申ノ九分ニ入

○一年晝夜長短六ツヽテの大畧

正月	中	晝五十ヨツ半ヨ 夜四十九ヨツヨ
二月	中	晝五十五ヨツヨ 夜四十四ヨツ半ヨ
三月	中	晝六十ヨツ 夜四十ヨツ
四月	中	晝六十四ヨツ 夜三十六ヨツ
五月	中	晝六十五ヨツ半ヨ 夜三十四ヨツヨ
六月	中	晝六十四ヨツ 夜三十六ヨツ
七月	中	晝六十ヨツ 夜四十ヨツ
八月	中	晝五十五ヨツヨ 夜四十四ヨツ半ヨ
九月	中	晝五十ヨツ半ヨ 夜四十九ヨツヨ
十月	中	晝四十七ヨツヨ 夜五十三ヨツ半ヨ
十一月	中	晝四十五ヨツ半ヨ 夜五十四ヨツヨ
十二月	中	晝四十七ヨツヨ 夜五十三ヨツ半ヨ

○その日記趣方之事

一その日その所の奮跡を尋風景の能不又は珍
奇物おゝくなるべし何月何日何所にて何を
見るまゝ残写一冊置追而改國の上にて立
派に浄書をつゝり清もつゝり閑もよろしかん
まれにその日その所広まりてよろしく出来ぬ
ものなどもあるべし

一又山川の真景おを画き遠きも其通
又は詩おを連俳ホの句心
ようのきたらバ連續せびとも其拙を日記ゝ書
ものなどもあるべし

○月の出入の事

●朔日	卯ノ四刻出 酉ノ四ノ二入	○十六日	酉ノ四刻出 卯ノ四ノ二入	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日
●二日	卯ノ八刻出 酉ノ八ノ二入	○十七日	酉ノ八刻出 卯ノ八ノ二入	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日
●三日	辰ノ二刻出 戌ノ二ノ二入	○十八日	戌ノ二刻出 辰ノ二ノ二入	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日
●四日	辰ノ六刻出 戌ノ六ノ二入	○十九日	戌ノ六刻出 辰ノ六ノ二入	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日
●五日	巳ノ一刻出 亥ノ一ノ二入	○廿日	巳ノ一刻出 亥ノ一ノ二入	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日
●六日	巳ノ四刻出 亥ノ四ノ二入	○廿一日	亥ノ四刻出 巳ノ四ノ二入	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日
●七日	巳ノ八刻出 亥ノ八ノ二入	○廿二日	亥ノ八刻出 巳ノ八ノ二入	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日
●八日	午ノ二刻出 子ノ二ノ二入	○廿三日	子ノ二刻出 午ノ二ノ二入	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日
●九日	午ノ六刻出 子ノ六ノ二入	○廿四日	子ノ六刻出 午ノ六ノ二入	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日
●十日	酉ノ一刻出 卯ノ一ノ二入	○廿五日	卯ノ一刻出 酉ノ一ノ二入	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日
●十一日	未ノ四刻出 丑ノ四ノ二入	○廿六日	丑ノ四刻出 未ノ四ノ二入	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日
●十二日	未ノ八刻出 丑ノ八ノ二入	○廿七日	丑ノ八刻出 未ノ八ノ二入	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日
●十三日	申ノ二刻出 寅ノ二ノ二入	○廿八日	寅ノ二刻出 申ノ二ノ二入	十三日	廿八日	十三日	廿八日	十三日	廿八日	十三日	廿八日	十三日	廿八日	十三日
●十四日	申ノ六刻出 寅ノ六ノ二入	●晦日	寅ノ六刻出 申ノ六ノ二入	十四日	晦日	十四日	晦日	十四日	晦日	十四日	晦日	十四日	晦日	十四日
●十五日	酉ノ一刻出 卯ノ一ノ二入		卯ノ一刻出 酉ノ一ノ二入	十五日		十五日		十五日		十五日		十五日		十五日

○潮の盈虚の事

朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日	十六日	朔日
二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日	十七日	二日
三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日	十八日	三日
四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日	十九日	四日
五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日	廿日	五日
六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日	廿一日	六日
七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日	廿二日	七日
八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日	廿三日	八日
九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日	廿四日	九日
十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日	廿五日	十日
十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日	廿六日	十一日
十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日	廿七日	十二日
十三日	九ツ八分	十三日	八ツ分	十三日	七ツ二分	十三日	五ツ八分	十三日	四ツ二分	十三日	三ツ四分	十三日	二ツ六分	十三日
十四日	九ツ四分	十四日	七ツ六分	十四日	六ツ二分	十四日	四ツ六分	十四日	三ツ二分	十四日	二ツ四分	十四日	一ツ八分	十四日
十五日	晦日	十五日	六ツ	十五日	五ツ	十五日	四ツ	十五日	三ツ	十五日	二ツ	十五日	一ツ	十五日

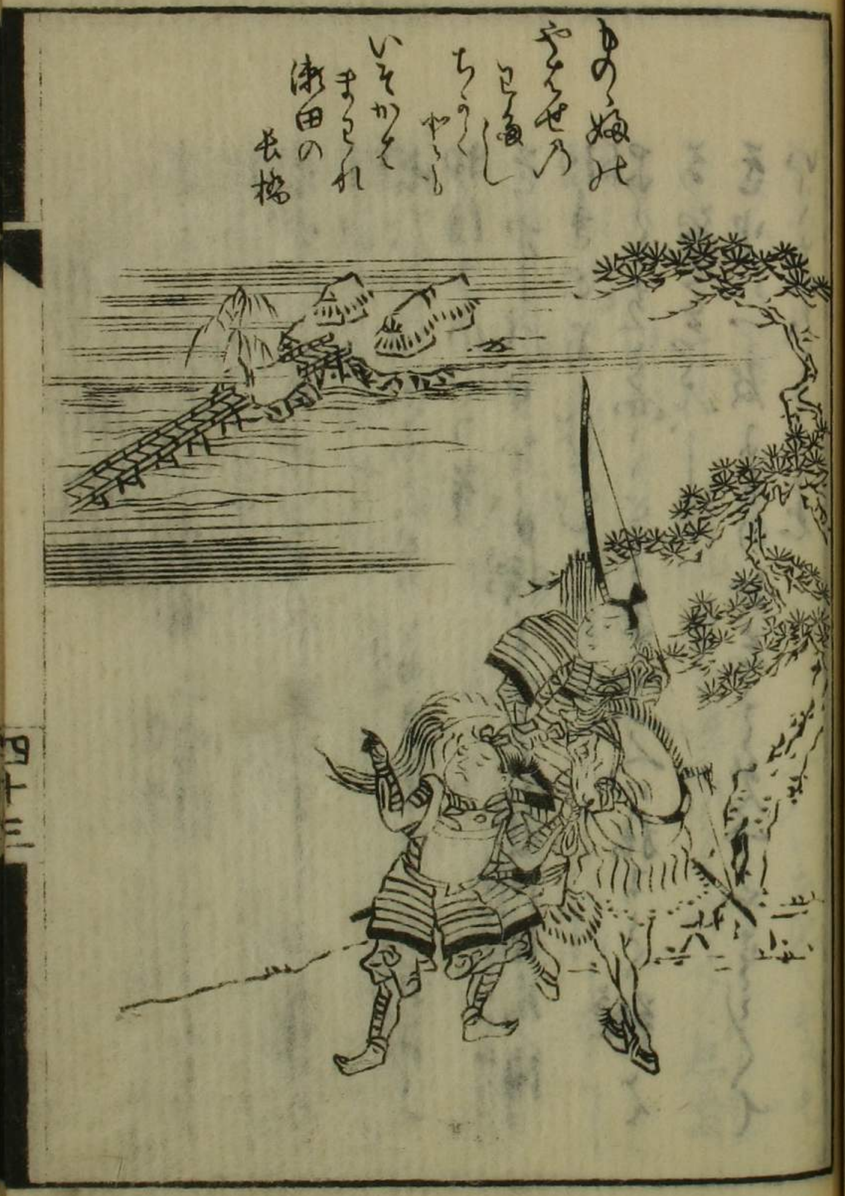
○日和見の事并古歌諺

一秋の九ツ時雲の出ハ又雲の出ハ六ツ時七ツ時より雲出ハ長雨又秋の出ハ七ツ時雲の出ハいかなるも其日和なり又秋の出ハ九ツ時の降出ハいよ〳〵よく夜そ

僅半日斗りまで降のつゞきの
一東風ハ雨よそうくきものあれども入梅と土用ハ吹
つきるゝ雨もあれども東風ハ雨あれハ秋晴をはら
さるゝ○雲夜に西ハ雨ふれハ西ハ風吹ハかるゝ雨ゝ○冬の日南風吹ハ三四の雪をはら
らゝ○西風ハ日和。東風。南風ハ雨風ゝ○四の
沒ハるゝハ風ゝ。夕ぐれ赤ハ大風の風雲ハ
あきハやむゝ雲の色紅白まれハ又大風ゝ○夜露ふれば
翌日大風ゝ○流星東へ飛ハ風ゝ。南へ飛ハ晴。西へ飛ハ
雨ゝ○月の出色白ハ雨ゝ。月のめさゝ星ハまハ雨

なり。笠かさなれハ大風ゝ月の入る光ほそきハ雨。
色白ハ風。虹雨あるハ雨ふらんとしてハ礎うるハふるものゝ○山あざやかなる雨
時ハ沙風ゝ又山ゝふれてつゞくされハ晴風ゝ○鳥水辺の
びるハかるゝ雨ゝ○蛤吹てかくすあるハ
晴ゝうすき雲ハ雨の下ゝ○蜘蛛の網ハ雨ゝ
夕ハ晴ばされゝ○蜑の烟りまよくして雨ふるハ晴ゝ
一虫をつゝくる國〻ハ日和をつゝくる國〻ハ雪

あり大坂をそいで丑寅の方へゆくを入ざと
いふ又未申の方よりを生をといふ
これも又よくふれば風つよく吹はれ日和もまるゐり
一天一太郎。八まん。古用三卦。寒ぼ卦といふ。天一
天上が朝日よりのぼるを天一太郎といふ。八まん三卦ともに
八專が入て二日めをいふ。古用三卦といふ土用が入て
三日めをいふ。寒ぼ卦ともに入てはじめ残りの生
もまたよりのぼる日よりふれば雪ふりくもりの
一天一時(いっとき)雨ふりて風ふくものそれをまた雪のよう一概(いちがい)にも
いひがたし大凡関東(かんとう)の西風(にしかぜ)は雨ふる関西(かんさい)の西風(にしかぜ)は雨
ふらず関東の東風(こち)は雨ふる関西の東風は雨ふらず
古歌 并諺
筑波(つくば)をれ浅間(あさま)の嶺(ね)よ
吹(ふき)おろせよ
四月雨雲を東風(こち)
雨ふるときれ
雲小風(くもこかぜ)みぞ雨(あめ)
降 霧 照 立 霧 降 霧
ふつきやむ ふつきやむ



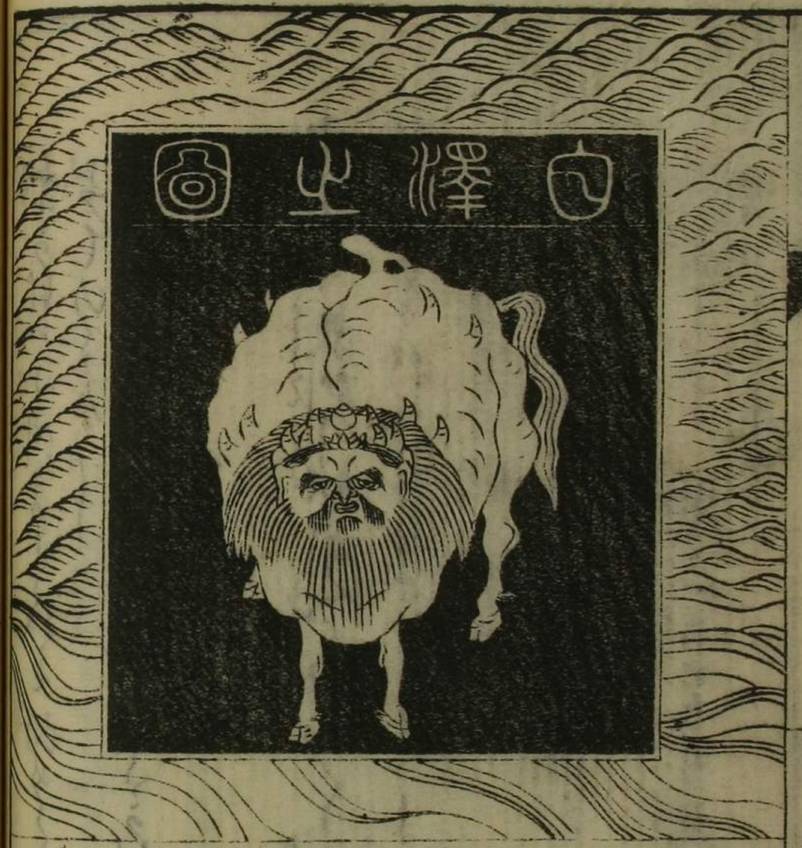
大の毒白田・和を知れ此詞を言ふ
雪吉のふれ合面よりする余れをたゞしうそよ
毒あそなし〳〵ふんやそく兄よき話ありおの
まうも関東まて四和をたゞし〳〵考へる事なる
乃一般る日和の人やうそ関東ていそ
山筑波山もさそうよう風面をもるやうそ
思〳〵まて同面あて和そ之因而そ申まてそ
まあそまて事を考へる人拾い四和の善悪よ因
而挨益あらそ川越ま和わる〳〵おれあるおほん
おの等筒あるべきまん

○旅行教訓歌

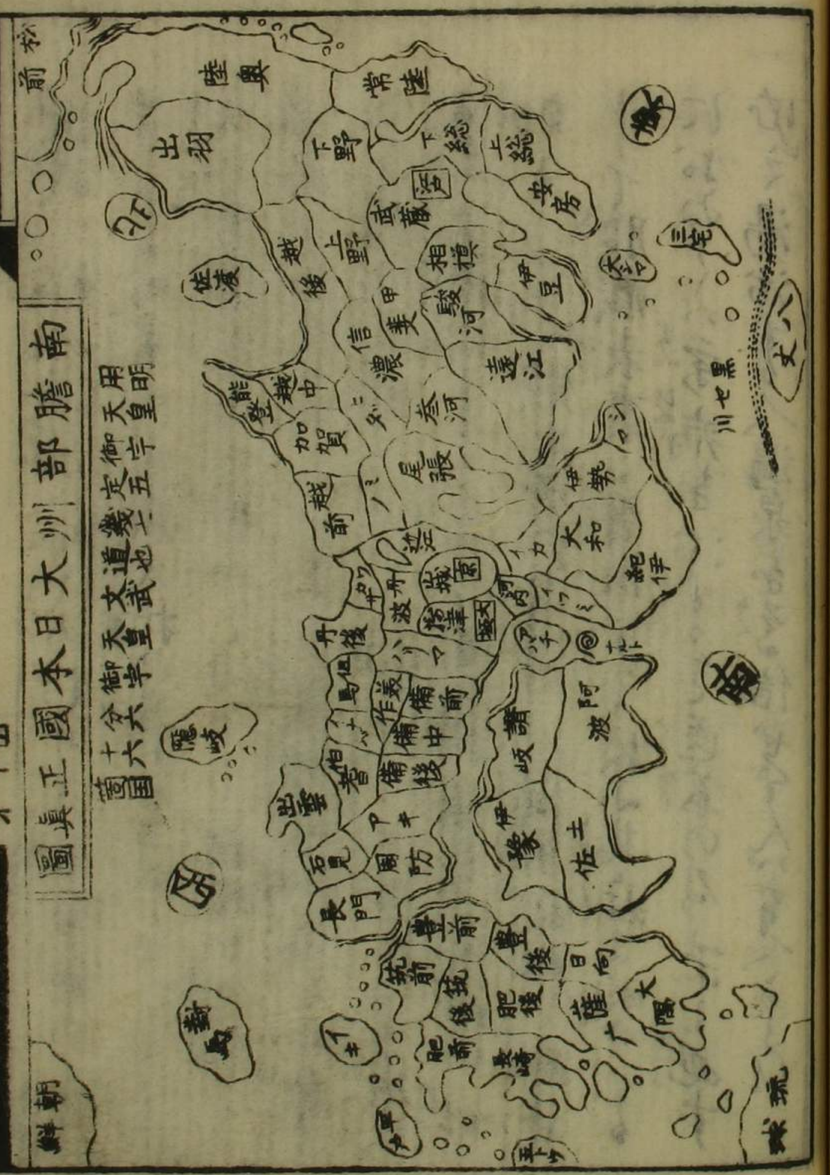
あらくらくと一よすの角二雪降こよひもふとゝ火のもとをそ申は自由をせんと思ふまゝすれそれがゆへたびのそらくめきをよくとゝめよ

そ申共するを人は川留故障のまとおんせむおくちとまるをいよ〳〵猶とまるべしをそ中いつ夜よものをもくく外千やとりくたひをそ申の食よりうまいお池も変もそうろうぬとまきくにおれ風あを味ひくくと画数ものもけつく上戸てもおくく大酒をすべのひおくまてのめてもゆく業おくたくいてまと志ぬ川志ぬちら通ちくとゝくくとも役和の船話珠ゆんたゞをまゝ引んくくのまあふる日あくるくさのくとなかりよ着て泊れでよきやとそそそ申いおまにんぞくありてそる自然まるかもよせよ

暗誦せざる間は
名旅り教訓の歌をくりかへし
旅りするおもひをなぐさめ
○旅立の歌
夏平のあすも此神の小柴さへ
ぬれ行む
吉田と云所



此白澤の圖我情中をれば善事をきゝめて惡事我まれでまた山海の災雜病患をまぬかるゝ開運昇進の祥瑞あると古今云傳ふる所以而旅中いと最尊信あるべし



夫我　陛下の温泉いと神代のむかし未醫藥のさだまらざる時民疾病大抔の患ひを救ひ給ひて大已貴尊宿奈彦那命と同く諸國を巡行して温泉を教へ給ひしより已来諸民病患を平愈するを得ること今に至る蓋之抑温泉の天地の妙効ありて人體肌膚経絡を融通して腹藏表裏を貫徹するなり其験ある事白日の如しと雖ども其症に的中するにおゐて治すると医薬の及ぶ所の能ざる所なり又物多く拙き山里の旅宿に於ては湯治する人の看病まで湯治する人温泉を尊信ずべきなり

一　左に著す所の諸國の温泉は唯養生の為に湯治する人の為又物多く拙き山里の旅宿に於ては湯治する人の為に見易きに依て其順路を随ひ里數を加へ効験ある大略を記すなり

一　湯治する人其温泉を尊信ずべきなり

一　湯治する人初一両度入て後胸腹を害し食物

味ひよきい相應ふ
てる胸腹さう食ひ良ひ味ひあ〳〵不進い先い不相應
ごとろ〳〵也おのる吐〳〵もと上入湯さへ〳〵紘ごも二三ふへてふれば
おのつ〳〵柏子もまつものより

一湯治の仕方いろ〳〵あ一日二回ゟ中い一日に三回ゟ
よ浪ろ〳〵相應ふる
ゟ〳〵老人又い氣ろるの人い甚敢あろろ〳〵又多年
の病い一回二ヶ回ゟそい不治ものあり左ゟ三四回又い
一二月も入ろ〳〵

一湯治中病人い勿論無病の人へそる禁じ慎む
べき物い飽食大酒房事次ろる食物ホ之又湯
上ゟい勢ひ毛の孔開也へ外邪をうけやすし〳〵深山の涼風よりも又い清ゐ
風吹ふろ〳〵称ふへし〳〵平生ゟ外邪
ゟりも湯上りふ交ろるい甚〳〵慎むべし〳〵

一温泉い熱して強盛のめ〳〵房すて時のうつを
最上とす温ろ〳〵ふる湯い
ホふのり紘ごも而ゟ濁ゟ色彩りなる湯ゟ
てる無毒温順ふして病ゟ能利湯もつり一概に

いおだてのごとく又湯の源一口にして汲取教訓へたるすれば云ふまでもなく其効能実に著きものあり此外温泉ある場所おいおいにおのおのまた其不思議を説くと汲取人に問合すべし

一 病毒ことのほか劇しく他の温泉にて治せざるもの凡四十ヶ國二百九十二ヶ所此餘洩るる温泉諸國おおしといえども偏く盡すあたわず此書に追く加入あるべし

諸國温泉

五畿内

大和

武藏

攝津

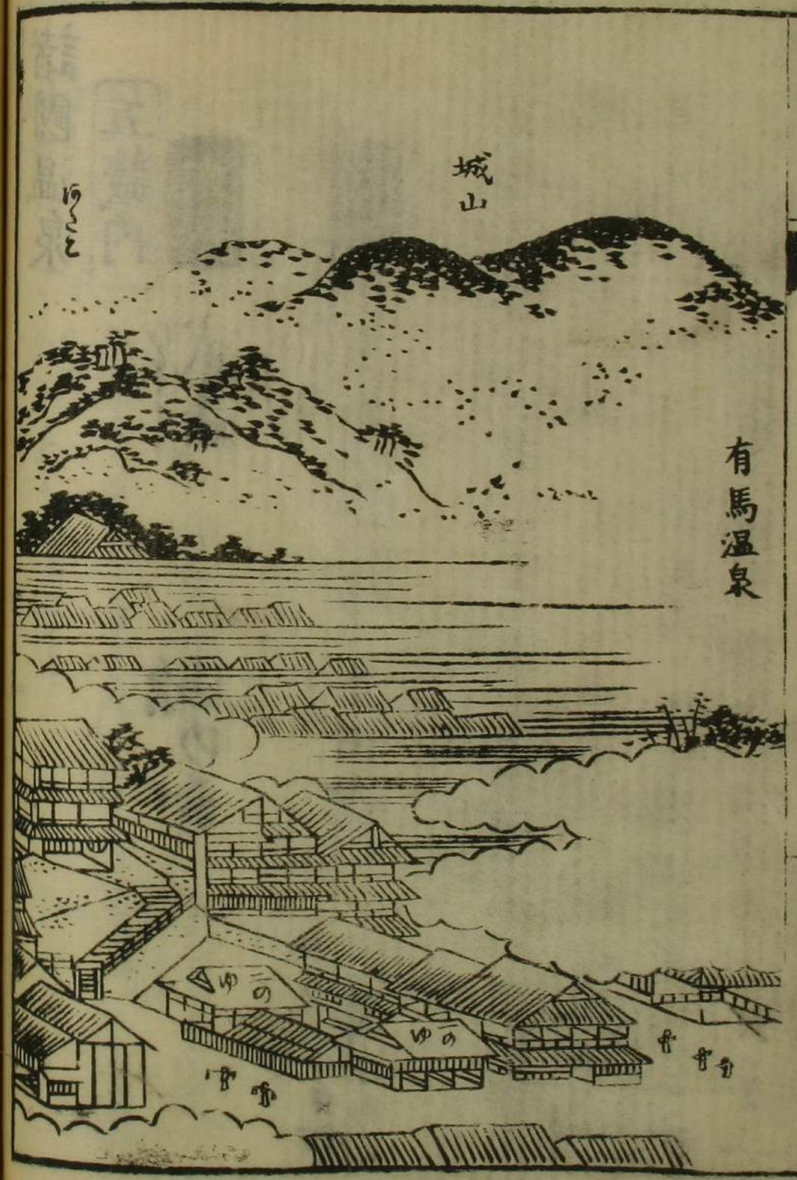
有馬 京より十四里 大坂より九里

多田 池田より 里ヨ

一庫 一庫村より

塩の巣

一有馬の湯の浴室一宇にして湯槽深サ三尺八寸竪二丈壹尺横一丈二尺五寸底ハ鋪石なり其石と間より竹筒を狹其中より湯涌出る之味ハ鹹中間より板壁を隔て南を一の湯と北を二



の湯をす湯宿二十軒ゟ南ハ相
ゟまり此外の家〳〵を旅人を留る小宿とゝふ二
十坊の家毎ゟ二婢ゟり一人ハ大湯女とゝひ通
称嫁女と唱へ一人ハ小湯女とゝふ是ハ年若なる
家〳〵ゟ通名を得ゟ此二人の湯女湯治する客人
小湯の廻りを告ゟ〳〵名ゟり定ゟ次第ゟ國の旅
客混雑ゟれゟゟ廻り書ふとゝゟ又遠湯と
いふあり是ハ湯幕を引て他の人をゟゞむ

一之湯 小湯女通名ゟり
大湯女ハ
奥ノ坊 夏女 伊勢座 竹女 御取坊 松女

尼崎坊　稔女　　称宜座　杉女　　角ノ坊　菊女
二階坊　栗女　　大門　辰女　　若狭座　市女
中ノ坊　常女

二之湯

池ノ坊　松女　　川崎座　弥女　　休ミ取　武女
河野座　光女　　兵衛　小夜女　　大黒座　竿女
水船　辻女　　下大坊　鍋女　　索麺座　菖女
萱ノ坊　紀女

一妬湯　此湯ハ湯本谷町にあり女化粧して此湯の側へ行ときは湯怒て沸出るよし

一明目湯　此湯ハ温泉寺の下にあり眼病によし

一多田の湯　一名平野の湯といふ浴室の廣サ方五丈許中を隔て男女各別に入ル此内ハ湯ぬるく湯治す

一庫の湯　此湯ハ多田より壱丁一廉村の山中にあり古のもる火ありてわづかに湧出る

東海道

伊勢

菰野　此湯ハ山中にて溪水まちかくてぬるき湯ゆえそこわづかにて入ル

遠江　蟲生　下部　奈良田

甲斐　川浦　黒平　湯村

塩山

伊豆　熱海 小田原ヨリ七里（ホカヨリハ根府川 御関所手形入ル此地温泉数多シ 上町ニアリ

大湯

清左衛門湯　法の側まで清き湯にて

小く味ハひ大よ沸出る

野中湯 上町清き湯の側まであり

法齋湯　下町ノ北野中ニアリ　此湯も清き湯にて

法高坊　くと味ハひ大小よ沸て沸出る

河原湯　法高坊の南よりの南対湯もよし

水湯

風呂湯　本町の北よりも湯もよし

走り湯　一名瀧の湯　熱海より半里ヨ権現の祠の有あり

小奈　東海ヲ見ル二島宿ヨリ三里下田海道あり

修善寺　川原ヨリ五里半　名湯あり

よし名湯ガ島　川原ヨリ七里半　伊藤　宇佐美

蓮華寺　湯ガ野　北湯ガ野

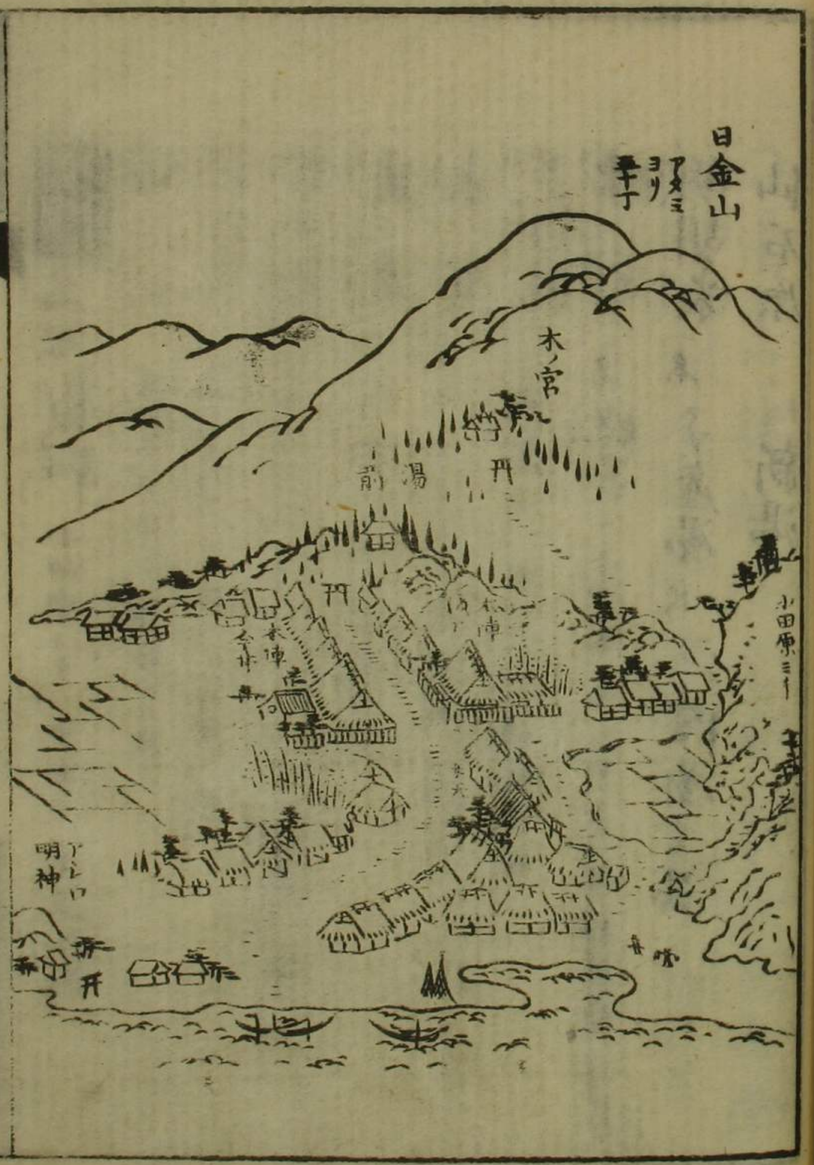
一熱湯の温泉は大抵湯ざわり鹹鹵くして其潔白なること鏡のごとく潮を交ゆる事多くは其氣柔和にして猛烈ならず諸病よく癒ゆるを関東第一の名湯とす湯宿数十軒各槽ありて大湯を引くと雖も此地は靈湯勝景多くして中日金山は天下絶景なり西南は三保の松原富士川坡見小谷富士足高巒峯連なり又海上は初島大島ホを山東は天木嘉賀伊豆諸峰連なり又海上は初島大島ホを凡西國より東國へ至る船舶此洋を不過ばあらず其外山禽海魚名産多くして旅客これ有用足ざるなし

一熱湯の効ある中風疝癪眩暈痰飲眼病頭痛腰痛肋氣筋攣跌仆折傷諸虫寸白痔漏脫肛痱痺疥癬諸瘡淋病金瘡五積六聚但シ腫氣あるものは忌むべし

一歯痛ある人湯を口中へ含てよし

一忌べき病は水腫脹滿癩病癲癇黄痰虚損ホの症慎んで浴をゆるさず

一脩善寺は筥湯石湯鳥の湯新湯獨鈷の湯ホ数種あり温熱浴ともに効驗ありてよわれる諸瘡積聚



一

○吉奈ハ温和ニシテ酷ダ冷ヘ冬ヲ凌ギ氣ヲ和メ肩ヲ没シテ温氣ヲ受ケ老人婦人腰冷下血寒疝或ハ中痞趾ノ蠱弱ノ人ヨロ〳〵温ムベキ病症ニ効ヲ得ルコト許多ナリトス

豆州加茂郡肖廬山脩善寺ハ山の風景唐土の廬山ニ似タリトテ宋の西蜀涪江の浮圖道隆號蘭渓大覚肖廬山と号ケ彼國理宗帝乃額其外奇品珎寺ニ藏ム勝景最佳也必ズ探ベキ所ナリ

箱根湯本　小田原ヨリ一里半ヨ　湯宿九軒

塔の沢　湯本ヨリ十二丁　湯宿十二軒

宮の下　塔の沢ヨリ一里半　湯宿八軒

堂ヶ島　宮の下ヨリ谷へ一丁斗リ下ル　湯宿六軒

底倉　宮の下ヨリ半道　湯宿四軒

木賀　底倉ヨリ半石　湯宿二軒

芦の湯　底倉ヨリ一里十六丁　湯宿五軒

禰宜　一名姥子　小田原ヨリ五里　定リ宿ナシ

胡桃米　一名子産湯又　河内湯一軒

仙石原　新湯

○湯あたり、諸瘡瘍。下痢。瘡毒。揚梅瘡。痼濕。結毒。五痔。腰痛。癪疝。金瘡よく効あり

○塔の沢ハ。頭痛。眩暈。下冷。打撲。くちきは舌の痛。血の道。癖癊。喘息。血瘕。

○宮の下ハ五痔。淋病。風疹。疝氣。す白よく効あり　功能同おゝし

○堂ヶ島ハ

○底倉ハ五痔。脫肛。疣痔、おる肛門の痛み

ゝ大効あり　小倡ふくとも湯治を

○木賀ハ　てうゝ瘨癇。筋骨攣急。頭痛。瘰癧。飲。撲損。内胸轉筋。痛風ニ効あり

○芦の湯 脚気。筋攣。結毒。孤臭。遺尿。淋病。ぜうくもち。小瘡。おこ 効あるも

○祢宜 姥子 効験未詳

○ちくめ 子産湯 河内湯 同断

○仙石原 あくま湯 同断

一 右相州箱根の温泉ハ江戸より廿里ばかりにて 御関所もおのおの道路の険阻なるに 都下より老若男女湯治もつきとなく 隙ま江の鎌倉金沢迄勝地おのく 気薬を散し 其効能ハ各湯に異なりといへども 都の便利最上なるを以て其盛昌成ること天下第一なり

九此七湯 各の名湯にして熟湯と兄弟を争ふべし 然ども熟湯と其里数相隔ること僅よし八里ばかりにて 行くもの ハ湯の効能に異なりといへども 都の便利を以て且此地東

武蔵 小河内 甲州堺之 切疵よく妙也

安房 馬杉

常陸 袋田 月待山の下ニあり 大そうそのこ

飛騨　下呂

信濃　田中 善光寺ヨリ六里　蒲田　平湯　落合

角間 四所ヨリ半ヲ　野沢湯 四所ヨリ北十里　山田湯 東ヘ六里　熱湯ニシテ万病ニよし　澁の湯 四所ヨリ六里半

大湯　玄蕃湯　大師湯

別所　古我湯　石の湯 山ニ五ツ穴別所村ニアリ

印内　田沢　内湯　山人湯 田沢村ニアリ

上諏訪 小綿湯　下諏訪 小綿湯　山家

七渕　浦野　白骨　澁間

上野　伊加保 鳥寄ヨリ六里湯宿十二軒壺湯三ケ所 洗湯一ケ所アリ

萬坐　篠根　草津 高崎ヨリ二十里　澁ハ十二筋アリ

須川　沼田　○諸瘡 頭痛 打撲 疼漏 癩風 癩風 悪瘡ニ効あり

法師ヶ峠 ○伊加保ハ 下疳 結毒 諸瘡 積聚ニ効あり

川原　四萬　澤渡

川端　川中

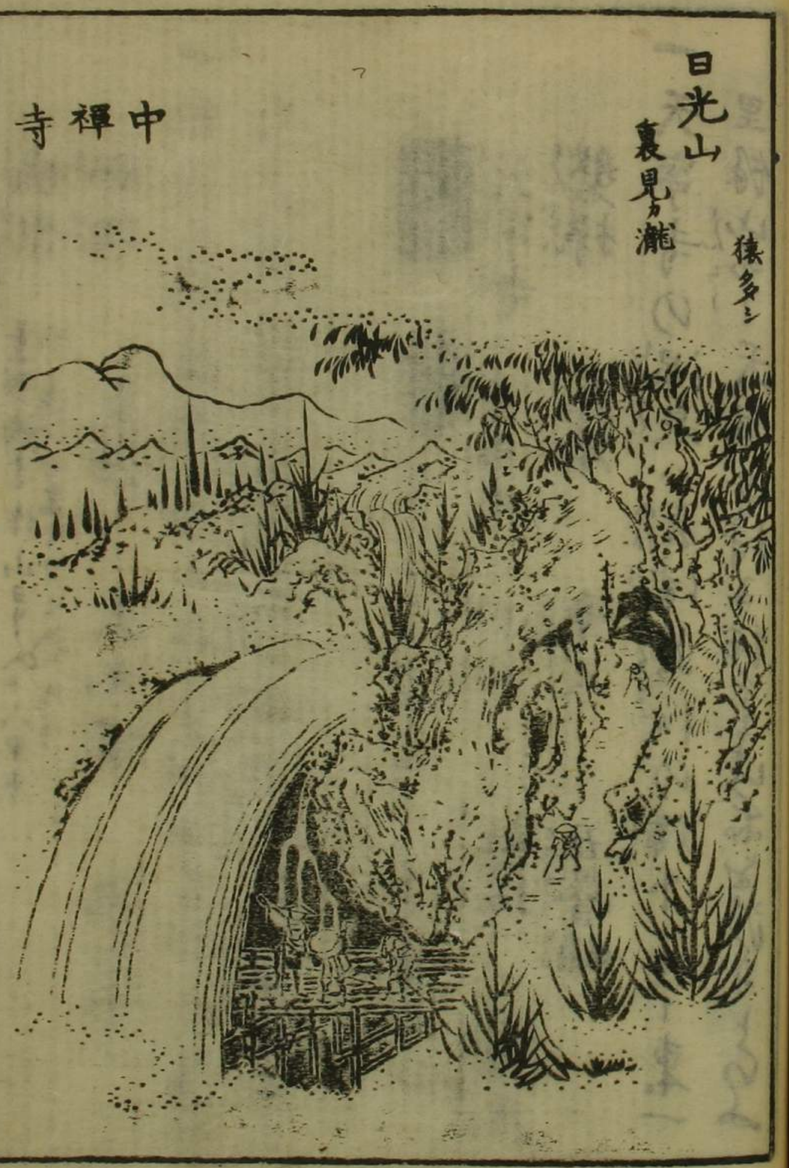
地蔵湯

綿の湯　熱の湯

澁の湯

就鳥ノ湯

一右伊加保草津の両名湯ハして優劣を
定がたし依て伊加保の効草津より



下野　日光山中禪寺　日光神石町ヨリ三里　湯宿八軒

御所湯　中湯　笹湯　自在湯

右谷名湯多し。六月中旬より九月末迄ハ遊客群集す。湯治する人、夏ハそも勿論冬も冬籠りする人、少なからず。

病症ハ草津の効伊加保よりまさるものあり。其餘ハ同國よりてゆまさるべし。

粗箱根と雖湯の如し。

瀧湯　姥湯　藥師湯　河原湯

塩原　元湯を作山より六里半　又もとゆより十八丁あり

那須　荒湯　大丸塚　福和田

一那須の湯は諸病よく効あれども別而よもぎを食れたる人湯治せざれば痛ち治ること遅き所にて浅瀬なり

陸奥

會津

江戸より六十五里白川より西へ入り温泉多し

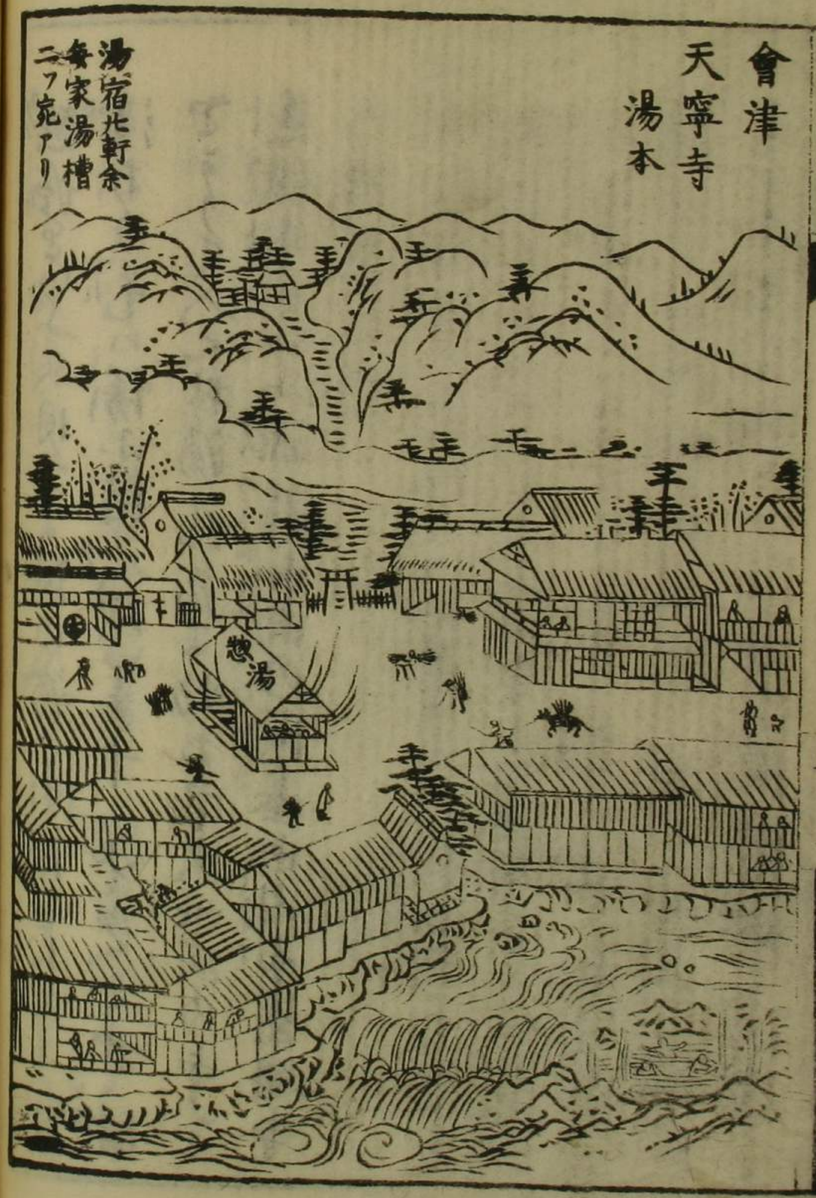
天寧寺　一名湯本　小谷　熱塩　沼尻

磐梯　荒湯　準人　五畳敷

一天寧寺の温泉いと多し里俗山中天寧寺村の湯本より東一

湯有数十軒の内大家あり湯の源へ一口ずつ湯を数十軒へ分配す　往昔甚温熱寒冷の差別あり　次ぐ効能あり　其中の効能よりて入湯されど諸病よく効あり　此湯に漬よく清潔して鰡のぬく旧年魚の名汤より又其町中に熱湯一宇あり　旅人草刈樵夫の来るを入込あり　此湯ぬるく温順よりて諸病ふ効あり又熱湯ありと雖ども同じく湯口より湯を引入るゆえ其中よりて其湯の下を浅く川あり　其中よりて同じく湯にて川の

木よ宮ノ内國まで一くみする和より湧出る此湯
眼病を治す又猿湯と云て山岬より流の脇よりこの
流を猿湯が流よう又此湯本より遥か大なる山坂
なり三丁を伴の湯川迄大瀧ありて甚
中ほど伏見が流と一雄雄の名瀑布二ノあり此流
の上なる山ノ腰より湧出る湯有二三軒あり皆此湯を流の湯と
いふ此湯もまた至て清浄まして諸病よく効あり
且此地の山ノ勝景画るが如し企及ふべからず
一同國若松よう小西へ七里餘まして熱塩村よう温
泉あり此湯山中より湧出る甚佳effaceあり因て俗よ
熱塩とのよう又同和よう建の湯とて銚をおろし置
湯あり皆入湯ふ雑人城いまず湯あふくとて建
をうりて入る此湯諸病よく効あり又此所の寺を
慈眼寺とのよう源翁和尚の開基也因て慈眼寺
の湯ともいふ
一同若松よう東北へ八九里まして猪苗代よりよう
磐梯山とのよう高山を左ふ中ふ温泉多し皆硫
地獄湯とのよう夏日よう至りて雪の消るを待て人々
湯治す此湯ふ入人家よう因而甚ふの湯宿
ともよう年々ふ大小屋を補理て貸ふ湯治する



人〻米味噌鍋釜の類を負ふより此湯
ハ最大熱湯ゆゑ米を煮れば黄ばみ菓に色湯口へ入ればハ魚飯と
なりまた菜類等のたぐひものの変色するなど
詩病ハ大効のまさるも看病の人ハ甚猛烈を恃て
入ゆるべからず餘國中四方山〻の温泉數〻
あり餘國の温泉ハ記事ありて世に行ふ故畧之此
地ハ江戸より僅ニ六十五里ありて但馬ハ城崎攝州
の有馬ハ名湯故甚大畧を記ス

青沼　川旅　折木　野神　嶽湯

土中　飯豊　温湯　赤湯　湯沢
飯坂　箱湯　灘湯　湯村　狐湯
山熱海　磐城　折木　名取　玉造
鳴子　鎌崎　湯本一名三箱の湯又沢子の湯ともいふ　東岳　砂子原
野神　湯本　青根　東岳　砂子原
湯入　湯原　湯岐
已上三十ヶ所八奥州白川より同仙臺南部堺までの名湯なり
温泉ニテ　いつまでも名湯なり
○三箱の湯ハ水戸より小へ北二里岩城郡平よ
城下よりも一里餘あり疥癬諸瘡ニ効あり

○湯岐ハ水戸より十八里西北ノ撲損脇氣中風
手足不仁の症或ハ婦人腰冷の類ニ効あり
○二本松の湯ハ城下よりも二里山よりの夏月ニ
あらざれバ入ることのならず積聚痔疾ニ妙なり
○鎌崎の湯ハ歩身金瘡ニ最効あり
○青根の湯ハ頭痛積聚虫氣ニ効あり
○飯坂ハ福島より三里半ありて左に羽黒山右に
信夫山を見て一村森泉村松川の渡村八反川
星の宿比良田村小川を渡りて飯坂なり
湯ハ五ヶ所あり
當坐湯　小湯　村中にあり

瀧の湯 川上にあり　箱湯 同　霧湯 川を隔てあり

熱湯 川の内にあり　右いつまでも名湯よくして

効驗同じくうらびむく湯有て病症を咄して

浴するに此所より山常泉寺という

此寺佐羽元司元治が菩提所なり此元治が

飯坂の温泉の元司なりという

○さいその湯湯は色ふかありという南部人

なるゆえ不詳

南部

臺湯　瀧ノ湯　上ノ湯　中ノ湯　鉢湯

箱湯　已上五ヶ所臺村ニアリ

繫湯　同　小室　同　瘡湯　川

松川湯　田沢村ニアリ　温湯　金田村ニアリ

下風呂　下風呂村ニアリ　新湯　田名部村ニアリ

山の湯　一名　花染の湯　荒湯　已上滿石村ニアリ

杉ノ下ノ湯　旧記ニよる

藥師湯　大湯村ニアリ　冷湯　田名ノ郡ニアリ　驚湯　脇沢村ニアリ

大湯　湯瀬湯　湯瀬村ニアリ

湯田湯　沢内村ニアリ　外道湯　和賀郡ニアリ

熊沢湯　鹿角郡ニアリ　國見湯　生内村ニアリ

鶯宿　鶯宿村ニアリ

津軽

藏舘　淺蟲　温湯
板留　沖浦　下湯
岩木島　須加湯　已上十二ヶ所各名湯也
大鰐　切明
碇ヶ関　湯端

出羽

赤湯　五色湯　銀山湯
上野山湯　高湯　温海
駒ヶ嶽　田川　已上八ヶ所各名湯也

加賀

湯涌　金沢ヨリ二里半
大聖寺　山中　金沢ヨリ二リ半
山代

能登

涌浦

越中

立山

越後

雲母　湯沢　村杉　今板
関山　妙香山ト云　横尾股　岩室　松ノ山
大内淵　眼掛湯　出湯一名観音湯ト云

山田　大牧　小川

但馬
- 城崎 — 癆湯 / 常湯 / 東槽 / 西槽
- 豊岡 — 曼陀羅湯 / 新湯 / 御所湯 / 乞者湯

一城崎の温泉ハ日本第一の名湯にて其中に七湯あり能効数多あり

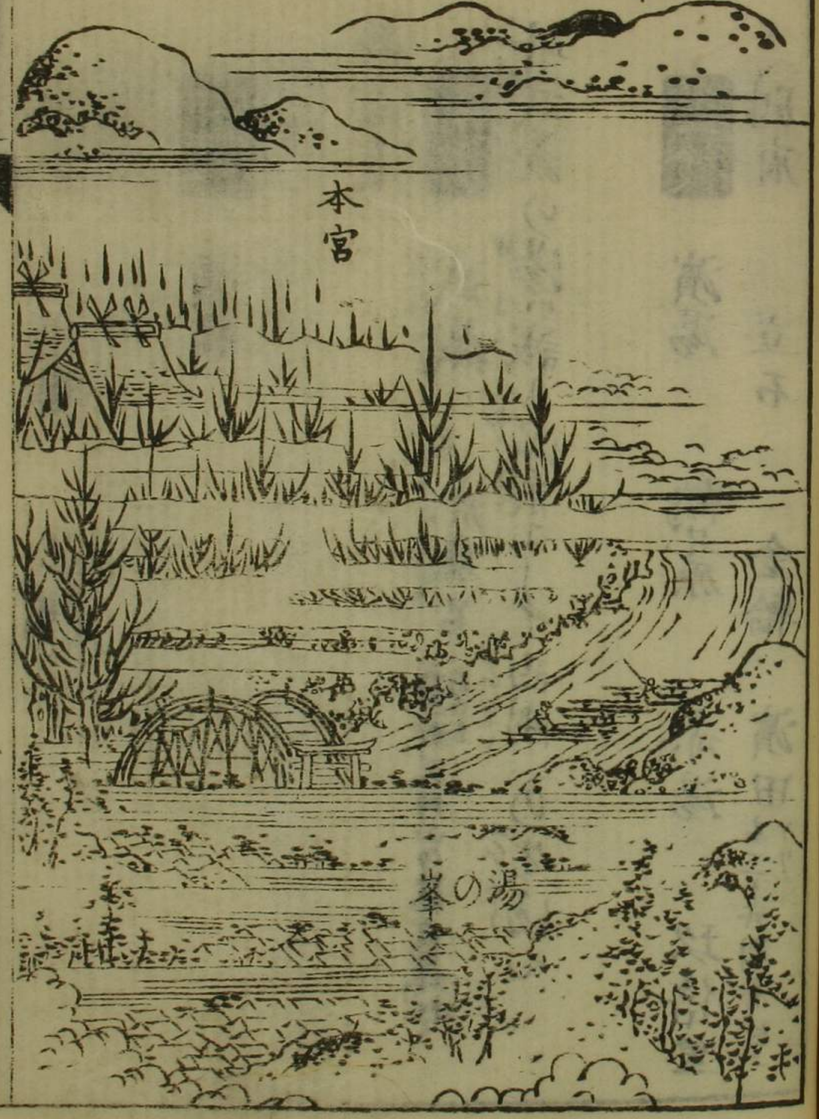
因幡
- 石井 小女郎 吉岡 — 入込 / 一ノ湯 / 二ノ湯 / 三ノ湯 女郎
- 新湯 — 右石井郡石井村ニアリ
- 二ノ湯 — 亀井殿

中湯 入込
勝見 一ノ湯
入込 新湯

伯耆
- 三徳 三朝の湯あり — 荒湯 / 癆湯 右高草郡吉岡村ニアリ / 二ノ湯 / 三ノ湯 / 鷺湯 右氣多郡勝見村ニアリ
- 湯の関

出雲
- 三沢 — 来仁川
- 玉造
- 潮村

石見
- 有福 — 温泉津 / 入て飯釜あり 温泉津ハ湯の清潔なる事



南海道

隠岐　島後　油中ニアリ

紀伊

美作　湯原　湯郷　真賀

周防　湯田　深川

長門　俵山　湯崎　川棚

龍神

本宮　一ニ湯ノ峯　茶師ノ湯

出谷　川湯　二河

伊豫　道後

西海道

筑前　武藏（むさし）一名虎麻呂（とらまろ）　筑紫都天拜山の麓武藏村に此武藏の湯ハ誠に温柔（おんじう）にして西國一の名湯（めいとう）なり

豊後　濱湯　鶴見原　赤湯　玖倍里

別府　立石　金輪　濱田　右三ヶ所別府村ニアリ

肥前　武雄（たけお）一名塚崎　嬉野（うれしの）　溫泉山地獄湯

小濱（こはま）溝ありて湯をたゝふ　高木

肥後　雛來（ひなこ）　硫黄嶽　橡木（とちのき）　湯谷

葦北　平山　垂玉　杖立　山鹿（やまが）

日向　霧島　白鳥　硫黄谷　かく久者あり

大隅　安樂　鉾薙（ほこなぎ）　踊あり

薩摩　副田入来あり　湯田市来あり
児水　成川山川あり
摺濱　芝立揖宿あり
市比野温泉あり　大河内出水あり

壹岐　湯本
凡四十國二百九十二ヶ所
一湯治おもに梅瘡散ぜんを主とすれども時々山渓まれに
極く微毒に中るものあり其養生のために
勘矣あるをきたるなり

○諸國御関所

遠州　今切荒井

相州　箱根　根府川　矢倉沢
河村　仙石原　谷ヶ村

武州　中川　市川　小岩
金町　新郷　小佛

下總　松戸房川　栗橋　関宿

甲州　本柄　鶴瀬　万沢

上州　川俣　碓氷　横川
猿京大戸　栗ヶ橋南牧　大笹狩宿

氣賀

五料實正　白井大渡　福島戸倉

近江　柳瀬　山中　鈒熊

信州　稲嶋　浪合　帶川　心川

小野川　熱川　清内路　木曽

越後　関川虫川　市振山口　鉢崎

一通りの形ハ大切ニ取扱ハ甚和の茶屋ニて一ぷく上
下共ニ御表所ニ而上下ニ而之手形ニ而相改メ申候（あらため）
ニ而ハ無程（ほど）より若一向ニ女通りハ
御断の時ハ女ニ而のハ不申候（ふもうしそろ）

左十八宿五割増
残ノ宿〻二割増

五割増	本馬	軽尻	人足
平塚	弐十一文	三十文	九七文
大磯	三百七十九文	百八十六文	百三十九文
小田原	六百十文	弐百三十文	三百十文
	下七百十八文	下弐百十文	下弐百九十文
箱根	七百九八文	弐百七十文	三百弐十文
	下六百弐文	下二百九十文	下二百文
三島	百六文	六十六文	弐十壱文
吉原	二百二十七文	百弐十文	百十弐文
蒲原	六十六文	四十弐文	三十六文
日坂	百四十弐文	九十二文	七十一文
	下二百弐六文	下弐百十弐文	下百十文
袋井	百八文	弐十八文	弐十文
舞坂	弐十二文	四十七文	十八文
新居	百十八文	七十弐文	弐十九文

中仙道　當時ハ割弐分増

守山　又割增　兵江ハ又割増

日光道中　當時ハ割弐分増

例幣使道　御成道ハ

石橋　四割ず增　雀の宮　四割ず增

甲州道中　當時ハ割弐分増

奥州道中　當時ハ割弐分増

喜連川　四割ず增

江戸日本橋より諸國出口之角道法

一 東海道口　南ハ南り不川宿へ弐り
日本橋より不川迄二里

一 中仙道口　就ハ南り本郷追分より
板橋宿迄一日本橋ゟ板橋迄二里十三丁

二川　百十四文　七十一文　弐十四文
赤坂　百六十文　百　六文　七十七文
萩川　百九十一文　七十七文　弐十九文
乙柳師　弐千一文　三十弐文　光七文
庄野　百二十一文　八十七文　六十六文

坂の下

三百四十七文　三百九十六文　百七十七文
下二百弐十文　下百七十七文　下百九七文

草津

三百弐十六文　百六十四文　百九六四文

右十八宿之外不川有之守口有之共二佐屋海辺渡舟趣有之時ハ別増有之此外中仙道回光道中甲州道奥州道中ハ駄賃割増有之

其中ハ伺之上ニ而又別増或ハ別増無有之候ハ、脇荷之両道中賃銭ハ別増ニ而ハ無之候

東海道五十三次駄賃附

本駄賃　本馬　軽尻　人足

日本橋　二り　九十四文　六十一文　四十七文
不二川　二り半　百十四文　七十二文　弐十六文
加日崎　二り半　百十四文　七十二文　弐十六文
久な川　一り九丁　四十九文　三十二文　二十弐文
程ヶ谷　二り九丁　百八文　六十九文　弐十二文
戸塚　三り二十丁　八十六文　弐十八文　四十四文
藤沢　三り半　百六十文　百弐文　七十八文
平つ　九六丁　三十四文　二十三文　十八文
大いそ　四り　百八十文　百九六文　九十文
小田原　四り八丁　四百九八文　三百廿文　三百八文
箱根　三り九八丁　四百七十七文　三百十二文　二百九八文
三嶋　一り半　六十八文　四十四文　三十四文
沼津　一り半　六十八文　四十四文　三十四文

木曽路六十九次駄賃附

木駄賃　本馬　軽尻　人足

京　三り　百六十九文　百十一文　八十二文
大津　三り半　百六十六文　百九文　八十一文
草津　一り半　六十一文　四十文　三十一文
守山　三り半　百四十五文　九十二文　七十一文
武佐　一り半　百六文　六十九文　弐十二文
老ノ川　二り八丁　八十文　弐十三文　四十一文
高宮　一り半　六十三文　四十二文　三十一文
鳥井本　一り六丁　四十七文　三十文　二十四文
ぞんる　三十丁　四十二文　三十九文　三十文
醒ヶ井　一り半　六十一文　四十文　三十一文
柏原　一り　四十二文　二十九文　二十文
今須　一り　四十二文　二十九文　二十文
関ヶ原　一り半　六十一文　四十文　三十一文
垂井　一り十二丁　弐十二文　三十代文　三十六文
ひの坂　一り八丁　八十九文　弐十八文　四十四文

一川越道口　乾之方ニ当る熊谷より上州へ抜る之間ニ日本橋より煉馬有之　三里
一岩附道口　乾之方ニ当る本郷追分ノ川口ニ而渡ニ付　四里半
日本橋ゟ川口迄
一甲州道口　西之方ニ当る四谷追分ゟ高井戸迄　四里半
此間ニ日本橋ゟ高井戸迄
一相州大山道口　申之方ニ当る山王下町ゟ長津田村迄　七里半
此間ニ日本橋ゟ
一奥州道并日光道口　北之方ニ当る千住ニ而　二里八丁
千住へ掛ル日本橋ゟ千住迄二三里ト
一水戸道口　丑之方ニ当る小塚原迄　二里
此間ニ日本橋ゟ
一下総道口　東之方ニ当る中川渡場迄　二里
此間ニ日本橋ゟ中川渡場迄二三里程ニ而有之候ニ付
右ニ而行ゟ不申候ニ付別ニ駄賃無之候
成田山・鹿嶋・香取・息栖・潮来・銚子之道
皆佐ゟ之通り

原	三リ六丁	百三十四文	八十四文	六十五文
吉原	二リ卅丁	百五十五文	百文	七十四文
蒲原	一リ	四十四文	三十文	二十二文
由井	二リ十二丁	百六十二文	百七文	七十九文
興津	一リ三丁	四十七文	三十二文	二十三文
江尻	二リ廿五丁	百廿一文	七十七文	五十八文
府中	一リ半	八十二文	五十三文	四十二文
まりこ	二リ	百四十五文	九十一文	七十文
岡部	一リ廿九丁	七十九文	五十一文	三十九文
藤枝	二リ八丁	百廿七文	八十一文	六十一文
嶋田	一リ	百廿四文	七十七文	五十八文
金谷	一リ廿四丁	百四十八文	九十四文	七十一文
日坂	一リ廿九丁	九十四文	六十一文	四十七文
		下百四十八文	九十四文	七十一文
かけ川	二リ十八丁	百十二文	七十文	五十三文
袋井	一リ半	六十九文	四十五文	三十五文
見附	四リ八丁	二百廿四文	百五十二文	百十七文
濱松	二リ半	百廿八文	七十九文	六十一文

ミ江寺	一リ六丁	四十七文	三十一文	二十四文
合渡	一リ半	六十七文	四十四文	三十四文
加納	四リ八丁	百七十文	百十六文	八十三文
鵜沼	二リ	九十四文	六十一文	四十七文
太田	二リ	九十四文	六十一文	四十七文
伏見	一リ五丁	四十二文	二十九文	二十文
みたけ	三リ	百四十五文	八十九文	六十七文
細久手	一リ卅丁	七十一文	四十六文	三十五文
大久手	三リ半	百八十五文	百廿二文	九十文
大井	二リ半	百十一文	六十八文	五十三文
中津川	一リ五丁	五十五文	三十六文	二十八文
落合	一リ五丁	五十五文	三十六文	二十八文
馬籠	二リ	百八文	六十七文	五十二文
妻籠	一リ半	八十三文	五十四文	四十二文
三どの	二リ半	百廿八文	八十文	六十三文
野尻	一リ卅丁	百三文	六十四文	四十九文
須原	三リ九丁	百五十五文	百二文	七十六文
上ヶ松	二リ半	百四十文	八十九文	六十七文

舞坂	海上	荷物一駄	[illegible]	人一人
	一リ	三十五文	三十一文	十二文
あらゐ	一リ廿六丁	七十六文	五十文	三十九文
白須賀	一リ十六丁半	六十七文	四十五文	三十三文
二タ川	一リ半	七十二文	四十七文	三十六文
よし田	二リ半卅丁	百十八文	七十五文	五十七文
御油	十六丁	三十二文	十六文	十二文
赤坂	二リ九丁	百七文	六十八文	五十一文
藤川	一リ半	七十八文	五十一文	三十九文
岡崎	三リ卅丁	百七十五文	百十六文	八十六文
池鯉鮒	二リ卅丁	百廿七文	八十二文	六十一文
鳴海	一リ半	六十九文	四十五文	三十五文
宮	海上	荷物一駄	[illegible]	人足一人
	七リ	百九文	百十三文	四十五文
桑名	三リ八丁	百五十二文	九十五文	七十二文
四日市	二リ廿七丁	百廿七文	八十一文	六十一文
石薬師	廿七丁	三十四文	二十二文	十八文
庄野	二リ	八十六文	五十八文	四十四文

ふく嶋	一リ半	七十七文	四十九文	四十文
宮ヶ越	二リ	八十三文	五十四文	四十二文
藪原	一リ半	七十七文	四十九文	四十文
ならゐ	一リ半	七十三文	四十八文	三十六文
贄川	二リ	九十四文	六十一文	四十七文
本山	三十丁	三十一文	二十文	十六文
洗馬	一リ卅丁	七十三文	四十八文	三十六文
塩尻	三リ	百六十一文	百六文	七十七文
下諏訪	五リ八丁	三百五十一文	二百卅八文	百七十二文
和田	二リ	八十四文	五十六文	四十二文
長久保	一リ半	六十文	四十文	三十文
あし田	一リ八丁	四十七文	三十文	二十四文
望月	卅二丁	三十文	二十二文	十七文
八わた	廿七丁	三十文	二十文	十六文
塩なた	一リ半	五十二文	三十四文	二十六文
岩村田	一リ七丁	四十七文	三十一文	二十四文
小田井	一リ十丁	四十九文	三十二文	二十五文
追分	一リ三丁	四十二文	二十九文	二十文

かめ山 一り半 六十九文 四十四文 三十四文
関 一り半 百十七文 七十三文 四十六文
坂下 二り半 二百九文 百四十六文 百十一文
下百六文 百十一文 八十三文
土山 二り半 十丁 百九七文 八十一文 六十一文
水口 三り十二丁 百四十六文 九十一文 七十文
石部 二り半 七丁 百四十文 八十八文 六十九文
草津 三り半 六丁 百六十六文 百九文 八十一文
大津 三り 百六十九文 百十一文 八十二文
京都 凡里數合百廿四里半十五丁

○佐屋廻りの記

宮 二里

本馬 軽尾 人足
八十六文 四十七文 四十七文

上十四日ハ万場へ付越あり

岩須賀 半り 二十二文 十四文 十二文
万場 一り半 九丁 六十九文 四十六文 三十四文
冠守 一り半 九丁 六十九文 四十六文 三十四文
沓掛 一り五丁 四十四文 三十二文 二十二文
軽井沢 二り半 七丁 百八十二文 百九一文 八十九文
坂本 二り半 百七文 六十七文 四十二文
松井田 一り廿丁 九十二文 六十一文 四十七文
安中 三十丁 三十四文 二十二文 十八文
板鼻 一り廿丁 七十一文 四十六文 三十四文
高寺 一り九丁 四十四文 三十六文 二十八文
倉賀野 一り半 六十一文 四十一文 三十一文
新町 二り 七十八文 四十一文 四十一文
本庄 二り五丁 百十一文 七十一文 四十二文
深谷 二り廿丁 百十二文 七十一文 四十四文
熊谷 四り八丁 百六十四文 百十一文 八十二文
鴻の巣 一り廿丁 七十一文 四十六文 三十四文
桶川 三十丁 二十七文 十九文 十四文
上尾 二り八丁 七十八文 四十二文 四十一文
大宮 二り十二丁 四十九文 三十四文 二十四文
浦和 一り半 五十三文 三十六文 二十八文
ゟびと 二り八丁 八十九文 四十四文 三十四文

佐屋 川舟三り
乗名

伊勢参宮道

四日市 二り廿五丁
神戸 一り半
白子 一り半
上野 二り半
津 二り
雲津口 二り
松坂 四り
小俣 一り半
山田
外宮
内宮 津ゟ 一り半
津 一り半
久保田 四り
関 東海道

秋葉山 鳳來寺参詣道

掛川口 三り
森 町 一り半
市のせ 一り半
子あ〜ら 一り
戌亥 二り廿四丁
秋葉 一り十五丁
うんなら 一り半
石うち 二り
くま 一り九丁
大平 一り半
酢山 一り
大野 一り
鳳來寺 九丁
かどや 三り

本坂越之道

見附 三り
かやんざ 四り
氣賀 三り
三日市 二り半
吹瀬山 四り
浜松 油 東海道
浜松 一り半
名古や 一り半
清須口 一り半
稲葉 一り半
おう 二り半

宮ゟ越前海道

宮 一り半

板ぐ 二り 九十四文 六十一文 四十七文
日本橋 凡里數合百三十五里十一丁

尾州名古屋ゟ大井出ん道法

名古屋 二り
槻川 一り半
坂下 一り半
内津 二り八丁
池田 二り
高山 二り
土岐 二り
釜戸 三り
大井 木曽

大津ゟ大坂道

大津 四り八丁
伏見口 五十丁
淀 口二り二丁

伊勢ヨリ大和廻リ奈良吉野高野道

山田（イセ）一リ
小ぞろ 二リ
くゝ田 二リ
松坂 一リ
六ゝんや 半リ
月本 二リ
ゑさひ四リ
なうの二リ
河口 三リ
山田 二リ
上野（イガ）二リ
鳴河原 一リ半
大河原 一リ半
かさ紀 二リ
か 二リ
奈良 一リ

伊勢ヨリ田丸越

山田 一リ半
田丸 二リ
あふが二リ半
はる 一リ半
大石 一リ半
みうき二リ
たけ 一リ
大きつ半リ
花原半リ
杉原 一リ
うず 半リ
もゝの一リ半
ゟ代又一リ

大坂ヨリ紀州道

大坂 三リ
堺 一リ
石津 三リ
岸和田 半リ
貝塚 二リ
志立 三リ
山中 一リ半
山口 二リ
和ゟの山口

伏見ヨリ大坂（下船）

伏見 十三リ
大坂

大坂ヨリ長崎道

大坂 三リ
尼ゟ崎口二リ
西の宮 五リ
兵庫 五リ
明石口五リ
もこ河 五リ
姫路 路口（西国ヘ）
姫路ゟ歩々ヘ乃法
三日月へ八リ
因州取鳥へ九リ
作州津山ヨリ
津山ヨリ（ゟ子ヘ）九二リ
松ノ（ゟ子ヨリ）ヘ七リ半
正所 十八丁
かゞ嶋 三リ弁
う 祢 二リ
九八丁

江嶋鎌倉道

日本橋 二リ
乃川 二リ半
川さ紀二リ半
かな川 一リ九丁
程ヶ谷二リ九丁
戸塚一リ九二丁

大坂

帯と紀一リ

市のゐ一リ
丹波市 一リ
柿本 一リ
三輪神社一リ
慈恩寺一リ
くせ観音ゟ半
さゝる半リ
河べ一リ
あもう十丁
岡寺 二リ
小坂 五十丁
多武峯二リ
ちまろ一リ
上市一リ
よしの一リ十六丁
吹せん一リ五リ
ところ辻 十八丁

江戸ゟ加賀信州善光寺道中

江戸ゟ追分ヘ六本曽高
追分 三リ
小諸口二リ半
田中二リ半
上田口三リ
さら木 三リ
軽井ヨリ三通りあり
八代 二リ 八代 二リ半
（猿嶋ヨリ）十 松代 二リ

福井 越前口

此所ヨリ
三国ヘ五リ
大聖寺ヘ九リ
小松ヘ十四リ
金沢ヘ九一リ

大坂ヨリ長崎道

大坂 三リ
尼ゟ崎口二リ
西の宮 五リ
兵庫 五リ
明石口五リ
もこ河 五リ
姫路 路口（西国ヘ）
姫路ゟ歩々ヘ乃法
三日月へ八リ
因州取鳥へ九八リ
作州津山ヨリ
津山ヨリ（ゟ子ヘ）九二リ
松ノ（ゟ子ヨリ）ヘ七リ半
正所 十八丁
かゞ嶋 三リ弁
う 祢 二リ
九八丁

ところ川 五十丁
つゝの内 十八丁
天の川 九り 此間宿ゝ多シ
高野山 五十丁
くらや 二り
うる 一り
かあろ 一り
もゝ本 二り
きれゝ峠 二り
三日市 二り半
いそむろ 二り
ふく町 一り半
ものず 二
堺 三り
大坂

江戸より奥州道 日本橋 二り

千住 二十八丁
草加 二十六丁
越ヶ谷 二十六丁
かすかべ 一り 九亭
杉戸 一り 五亭
幸手 二り 三丁
栗橋 カワタシ 二丁
中田 一り 九四亭
古河 北 五丁
のぎ 一り 七丁
まゝ田 一り 四丁
小山 一り 十丁
新田 北 九丁
小金井 一り半
石ゝ 一り半 五丁
雀の宮 一り 一丁
宇都宮 二り 五亭
白沢 一り半

大山参詣道

萩沢 三り半
かまくら 二り
江の島

萩沢 東海道 二り
一の宮 十八丁
田村 二り
いせ原 一り
子安
大山

江戸より甲州富士山身延道 日本橋 二り

四ツ谷 二り 二丁
下高井戸 二り 二丁
布田 二り 七丁
府中 二り 八丁

善光寺 川田 二り半
荒町 二り半 長沼 三り
室井 室井 二り
拍原 一り
野尻 一り
関川 一り半
二俣 一り半
関の山 二り 六丁
松崎 二り 九丁
荒井 二り半
高田 二
中屋敷 二り
長濱 一り
有間川 二り
おゝもち 三り
のふ 二り 上二丁
ゆら屋敷 一り 六丁
糸魚川 二り 十六丁

三ツ石 二り 四丁
片上 四り 二丁
萩井 二り 五丁
岡山 二り 二丁
板倉 三り
川邊 三り
矢のみ 三り
七日市 二り 二丁
高屋 二り 七丁
神苗 四り
今津 二り
小野道 三り
見ゆら 二り半
ぬく本郷 一り半
なまり市 二り
さい糸 五り半
かいく 二り
廣嶋 ニシリ

日野 二り 六丁
八王子 二り 七丁
駒木野 北 七丁
小仏 二り 二丁
小原 二り 十七丁
よこの 北 六丁
関の 三十四丁
上野原 十八丁
つる川 一り 六丁
のゝ尻 三十丁
犬目 二り 二丁
上鳥沢 北 六丁半
さるぐち 北 二丁
駒ぐち 十六丁
大月 三十丁
此所より山ぢ
大月 十三丁
矢村 一り半

あふこ 二り 九七丁
うさく 二り
市ふり 一り
さく 二り 九九丁
泊り 左 二り 九九丁 右 一り 二丁
横山 右 九七丁
ふえ 二り 六丁
舟見 左 二り 六丁
浦山 二り 七丁
三日市 二り
うえつ 二り 丁
滑川 二り 五丁
東いろは 二り 四丁
下村 一り 七丁
小すき 二り 五丁
高岡 四り
今不動 二り 六丁
そふう 十四丁
竹の橋 二十丁
はそぐ 三り半

此所より
宮島へ 四り
御濱田へ 九三り
草津 二り
廿日市 四り 八丁
くち 二り
せきの一 四り
此間岩国道アリ
くがな 半り
高めや 二り
今市 二り
窪田 九八丁
花岡 二り 半八丁
徳山 半り
富田新田 北 二丁
あい河 二り半
このくち 二り
宮市 四り半

氏江 二リ 四丁
きれ川 二リ 半ヨ
作山 一リ 五丁 ヨリ
太田原 三リ 二丁
おべうけ 六丁
こも城 二リ 十丁 ヨ
芦野 三リ 四丁 ヨ
白坂 一リ 半 三丁
白川 五丁 口
秋だ 一リ
小田川 十三丁
大田川 二十四丁
ふませ 二十三丁
大和久 八丁
志ん田 十一丁
矢吹 九四丁
くろ一 十二丁
笠石 一リ 半

おのま 一リ 半
上吉田
富士山
下花崎 一リ 五丁
下初り 一リ
白野 一リ
黒野田 一リ 半
つゝせ 一リ 三丁
剣沼 二リ 十七丁
石和 一リ 九丁
甲府口 こうの
かちう沢 石沢より
羽木井 五リ 半
身延山 東海名所
南部 三リ
万沢 四リ
松の 二リ
岩淵 東海名所

金沢 加賀口
金沢より小松大聖寺道
金沢 一リ 富山へ
の市 又 金沢より
松とり 富山 三リ 十丁
かりの下 三戸田 一リ
水嶋 一リ 中田 一丁
栗生 一リ 戸水 一リ
寺井 一リ 今不動 一リ
小松 一リ 口 えぶう寺
今井 一リ 竹の口 一丁
月津 一リ 少々 一里
ふるたち 金沢口
佐見 一リ 滑川 四リ
大聖寺 富山へ
豊前小倉より薩摩鹿児嶋道

木のくり 山中へ 二リ 半
此所より
長門敷 へ 十リ
山中 二リ 半
舟木 一リ 八丁
白さぎ市 一リ 一丁
うら田 一リ
小月 二リ
長府口 二リ
下の関 三リ
小倉 口 黒崎へ 一リ 三十丁
此所より
中津 へ 十三リ
小倉より田代迄
両道一リ
ひや水通り分
小倉 二リ 一丁
黒崎 一リ 一丁

江戸より上総 房州 道法

行徳 三リ 六町
舟橋 二リ 臼井 一リ
馬加 一リ 佐倉 一リ
椎見川 一里 横芝 一里
寒川 三リ 東金 三リ
そりよけ 一リ 野田 一リ
そまれ 一リ 千葉 一リ
八ぐさ 一リ うねの方 一リ
五井 一リ 六地蔵 一リ
姉崎 二リ 高師 一里
ならべ 二リ 一ノ宮 一里
木更津 四リ 一里 町
佐貫 一リ 流山 一リ
天神山 一リ 半 長南 二リ
百首 二リ 大多喜 一リ
金谷 一リ 今富 二リ

小倉 二リ 一丁
黒崎 二リ 一丁 半
ふとの 四丁 半
飯塚 三リ 半
内野 一リ 九丁
山上 一リ 九丁
原田 二リ
田代
此所の入口三人丁峠の通り下り出る
小倉より八町峠通
小倉 一リ 一丁
ふじの木 一リ 十四丁
さいとう松 一リ
いのむさ 二リ
大くま 一リ 三丁
せんじ 二リ 十四丁
間八丁峠下り

こやのせ 四リ 半 一丁
飯塚 三リ 半
内野 一リ 九丁
山上 一リ 九丁
原田 二リ
田代

荻田 一リ七丁
貝田 十八丁
こすがう 一リ十六丁
さい川 一リ十六丁
白石 一リ九八丁
葛田宮 一リ十二丁
金がせ 三十丁
大河原 一リ十二丁
舟迫リ 一リ十丁
概木 一リ九七丁
岩沼 一リ九丁
倍田 九一丁
中田一リ
長町 一リ十三丁
仙臺 二リヨ
七北田 二リ十九丁
名ゐ町 一リ九二丁
吉岡 三リ十丁

保田 一リ 安房
勝山 三リ 久留里 一リ
大房 二リ 如浦 二リ
府中 二リ 上野 一リ半
北条 一リ 小湊 安房 一リ
舘山 一半 内浦 一リ
那胡 一リ 天津 五リ
洲崎 乙濱
江戸ヨリ鹿嶋香取息栖へ
日本橋 三リ
行徳 一リ
八幡 二リ
釜ヶ谷 二リ八丁
白井 二リ二八丁
大森 九六丁
木おろし 陸路 二リ 洲乗り舟
潮来へ 七リ

三本木 一リ九分
古川 一リ十二丁
ひらや 一リ九丁
高清水 二リ十九丁
月立 九 丁
宮野 一リ九丁
沢辺 十八丁
金成 二リ六丁
有壁 二リ二丁
一の関 九丁ヨ
山の目 三リヨ
前沢 二リ九丁
水沢 一リ九四丁
金寄 二リ六丁
鬼柳 十八丁
黒沢尻 三里
花巻 三リ十丁
石とや 二リ
郡山 四リ七丁

鹿島へ 九リ
香取へ 十リ
息栖へ 十二リ
銚子へ 十八リ
木おろし 陸路 二リ
安食 四リ
神崎 二リ
津宮 三リ 神社
香取 神社
小見川 二リ
佐々川 二リ
野尻 二リ
銚子
江戸ヨリ日光道中
日本橋 二リ
千住 二リ七丁
草加 一リ九丁

佐原 四リ半
水の俣 四リ二丁
いの川 二リ四丁
野田 二リ半
阿久根 三リ半二丁
西方 三リ半十丁
向田 三リ半十二丁
みなと 二リ半七丁
苗代川 三リ四丁
横井 十七丁
鹿児島 薩ノ
琉球国 百九里
瀬のよ 白川より
米沢道 會津道
せの上 九丁 白川 一リ半
佐々木 一リ 鏡用 一リ
庚坂 二リ八丁 小や 二リ
李平 二リ八丁 牧内 一リ半

秋月 二リ
野町 一リ六丁
松崎 二リ九丁
此所より久留米へ 三リ
此所より柳川へ 五リ
此所より熊水へ 十六リ
田代 裏へ 一リ
此所より冷水通り 弘谷 三リ二丁
ちゝろさき 一リ二丁
中なる 二リ九丁
ひんさき 一リ半
そその町 一リ半
さゝ 二リ
牛津 一リ
小田 二リ十二丁

坂谷 三リ 永沼 二リ
大沢 二リ 勢至堂 二リ
米沢 口 見代 半リ
粕目 一リ 福良 一リ半
筑茂 一リ 赤津 一リ半
赤湯 一リ 原 一リ半
川通 四リ 赤井 二リ
老滝沢 二リ 會津 松本 口 二リ
中山 一リ 高久 二リ半
川口 一リ 板下 一リ半
上の山口 半 先き 二リ半
戦バ 二リ 野沢 一リ半
山辺 一リ 野尻 一リ半
長崎 一半 白坂 一リ半
さゝ久利 八田 一リ半
白岩 二リ 焼山 一リ半
海道 一リ半 天満 一リ
佐沢 一リ半 津川 二リ

成瀬 二リ 丁
塩田 二リ九四丁
嬉野 二リ六丁
その木 三リ
松原 一リ
大村 口 三リ
いさそや 四リ
矢上 一リ
日見 二リ
長崎

大坂ヨリ長崎へ船路
大坂 十リ
兵庫 五リ
明石 十三リ
室 五リ
大島 五リ
牛窓 七リ

南部盛岡 四リ廿七丁
志ぶ民 四リ三丁
沼宮内 八リ八丁
一の戸 一リ卅一丁
福岡 七丁
金田市 三リ二丁
三の戸 三リ十五丁
麻水 一リ十七丁
五の戸 一リ廿四丁
傳方寺 卅丁
荻島 三リ卅丁
七の戸 五リ廿五丁
野辺地 四リ十三丁
小湊 四リ十丁
野内 二リ十七丁
青盛 一リ十三丁
大濱 三リ十九丁
蓬田 二リ三丁

越ヶ谷 二リ卅丁
かすかべ 一リ半
杉戸 一リ半
幸手 一リ廿二丁
栗橋 二リ廿二丁
中田 一リ半
古河 北九丁
野木 二リ
まつ山 七リ半
小金井 一リ半
石ばし 一リ半
雀の宮 一リ廿三丁
宇都宮 一リ半
野沢 一リ半
徳二良 二リ半
大沢 二リ

本名 一リ 湯口 二リ
いさご 二リ半 荒屋打
志つ木 一リ 綱木 一リ半
たむき 二リ 赤谷 一リ
大網 一リ半 山内 二リ
松根 二リ 芝田口
九岡 一リ 米倉 一リ
鶴岡 一名 いさ峯 一リ
東折ら
秋田道
加持 一リ
中条 卅二丁
乗折 一リ半 黒川 八リ
小坂 二リ 平林 二リ
上沢 一リ 村上 北
下沢 一リ
本店道
庄内ら
渡せ 一リ
瀬木 一リ 鶴岡 一名
あつみ 二リ 荻島 二リ
岸田 一リ 新川 五リ

ひぐ 三リ
志もてい 七リ
白石 三リ
鞘 五リ
由げ 十リ
三ならい 五リ
かまくそて 八リ
津和 五リ
うむろ 七リ
上の関 五リ
室すこ 五リ
ひさくま 七リ
むろう 五リ
新宿泊り 十三リ
下の関 三リ
〇下の関ら大里二リ
陸大名方へ大里ゟ
松ら仙とり名成

蟹田 二十六リ
平館 五リ八丁
今別 一リ八丁
三厩 海上七リ
松前 口
〇野邊地ゟ佐井通
野辺地 一リ八丁
有戸 四リ九六丁
横濱 二リ七丁
中野沢 三リ九一丁
田名部 三リ七丁
大畑 二リ九一丁
下風呂 二リ卅五丁
異国澗 一リ廿五丁
大澗 一リ十丁
奥戸 二リ
佐井 海上八リ
松前箱館

今市 二リ
鉢石 十丁
日光

江戸ゟ水戸海道
日本橋 二リ
千住 一リ
新宿 一リ
松戸 二リ
小金 三リ
あびこ 一リ
取手 二リ
荻代 二リ
若柴 二リ
牛久 二リ
荒川 二リ
中村 一リ
土浦 一リ

湯原 二リ 酒田 六リ
橋下 二リ 吹浦 一リ
上の山 一リ半 女鹿 一リ
松原 二リ 小砂川 一リ
山形 二リ半 塩越 一リ
天童 一リ 象潟
六田 一リ半 金の浦 一リ
矢島 一リ半 本庄
飯田 一リ 平沢 三リ
林田 一リ半
尾花沢 二リ 秋田ゟ
柳沢 一リ 津軽道
丹方 三リ 久保田 秋田 四リ
清水 二リ 湊 一リ
相良 二リ 大窪 十丁
古口 六リ 蛇川 一リ
新庄 一リ 大川 二リ
金山 二リ 廃渡 一リ半

小倉 二リ 廿一丁
此所ゟ福岡道
小倉 二リ 卅丁
黒崎 二リ 廿一丁
木やせ 四リ
赤間 二リ
頓せ町 二リ
青柳 三リ 廿五丁
箱崎 九二丁
博田 一リ
福岡
黒崎 二リ 廿一丁
ゑのせ 四リ
飯塚 三リ
内野 二リ 九丁
山上 一リ 九丁
原田 二リ
田代

本馬 此六貫目
乗掛下 十ノ目より
駄荷 三ノ目より
口あり 八ノ目まで

右の駄賃ハ右ニ記
せる駄賃を二つ
合〳〵三つの割則
一ツ乗り駄賃
たとへバ駄ちん
百文の附二つ合
せバ二百文となる
これを三つに割バ
六十四文と成る
是ハ

金壱両 又ノ目
此駄賃ハ本駄賃の
半分なり

中ぬき 一り
稲石 二り
府中 一り
竹原 一り
片倉 二り
おでく 二り
長岡 二り
町家 一り
わふち 一り
川原の一り十丁
折ち〳〵 一り
大中 一り
小中 一り

のぎ 三り 森岡 三り
隙内 一り 檜山 三り
横田 一り 鶴形 一り半
湯沢 四り 飛根 一り半
横谷 二り 荷場 一り
金沢 一里 小繁 一り
六郷 一り 前山 一り
大曲 一り 今泉 九丁
花立 一り 房沢 三り
神宮寺 一里一り
刈和野 一り 大舘 一り
堺 一り 駅迄内 一り
戸嶋 三り 破関 五り
久保田 城下 弘前 津軽口
湊へ 一り 此所より陸地三馬
松前海上 屋まで
七十八里 二十八里

是ゟ長崎へ前ゟ同
肥前名子屋ゟ
對馬朝鮮里數
名子屋 船路 十五り
勝本 四十り
對馬口 四十八り
朝鮮国
大坂より釜山浦迄
三百七十里餘
長崎より外國里數
南京へ三百四十里
廣東へ八百七十里
東京へ千六百里
東韃靼へ千八百里
暹羅へ二千三百里
天竺へ一万四千百四十里
阿蘭陀へ一万二千九百里
イキリスへ一万二千九百里

西國三十三所
觀音靈場地名

一番 紀伊國 那智山
二番 同 紀三井寺
三番 同 粉河寺
四番 和泉國 槙尾寺
五番 河内国 葛井寺
六番 大和国 壺坂寺
七番 同 岡寺
八番 同 長谷寺

秩父三十四所
觀音靈場地名

一番 四万部 妙音寺
二番 大棚 眞福寺
三番 岩本 常泉寺
四番 荒木 金昌寺
五番 ゴカノ堂 語歌寺
六番 牛伏 法長寺
七番 青苔 西善寺
八番 同星谷 星谷寺

坂東三十三所
觀音靈場地名

一番 相州鎌倉 杉本寺
二番 同三浦 岩殿寺
三番 同鎌倉 田代堂
四番 同 長谷寺
五番 同足柄郡 飯泉
六番 同飯山 長谷寺
七番 同金目 光明寺
八番 同星谷 星谷寺

九番 奈良 南圓堂
十番 宇治 三室戸寺
十一番 山城 上醍醐寺
十二番 江州 岩間寺
十三番 同 石山寺
十四番 同 三井寺
十五番 山城 今熊野
十六番 同 清水寺
十七番 同 六波羅蜜寺
十八番 同 六角堂

十九番 同 革堂
二十番 同 善峯寺
廿一番 丹波国 穴穂寺
廿二番 摂津国 総持寺
廿三番 同 勝尾寺
廿四番 同 中山寺
廿五番 播州 新清水寺
廿六番 同 法華山
廿七番 同 書寫山
廿八番 丹後国 成相寺

九番 明星山 智恩寺
十番 万松山 慈恩寺
十一番 坂氷 樂寺
十二番 佛通山 里坂 寺
十三番 分イタ 慈眼寺
十四番 長岳山 今宮坊
十五番 母巣山 藏福寺
十六番 無量山 西光寺
十七番 ハヤシ寺 定林寺
十八番 神門寺

十九番 飛鳥山 龍石寺
二十番 岩の上
廿一番 矢の堂
廿二番 榮福寺
廿三番 音樂寺
廿四番 法泉寺
廿五番 久昌寺
廿六番 圓融寺
廿七番 大淵寺
廿八番 橋立寺

九番 武蔵国 慈光寺
十番 円比企岩殿 正法寺
十一番 円吉見 岩殿 安樂寺
十二番 円岩付 慈恩寺
十三番 江戸 淺草寺
十四番 武州 弘明寺
十五番 上州白石 長谷寺
十六番 同 水澤寺
十七番 下野佐野 出流山
十八番 同日光 中禪寺

十九番 下野 大谷寺
二十番 同益子 西明寺
廿一番 常州八講 日輪寺
廿二番 円天神林 佐竹寺
廿三番 円笠間 佐白山
廿四番 円岡引 樂法寺
廿五番 円筑波山 大御堂
廿六番 円南明山 清瀧寺
廿七番 下総銚子 飯沼山
廿八番 円滑河 龍正院

5年1月

九番 若狭国 松尾寺
廿番 江州 竹生島
卅一番 同 長命寺
卅番 同 観音寺
卅三番 美濃国 谷汲寺

右谷汲寺と巡廻信州善光寺へ参るまで加納へ出夫の木曽路洗馬より右へ行なり

歸厚客話

景山先生著 初編十冊近刻

卅九番 長泉院
卅番 寶雲寺
卅一番 観音院
卅二番 法性寺
卅三番 菊水寺
卅四番 水潜寺
卅五番 普門書遍 千葉寺
卅六番 上総高倉 高蔵寺
卅七番 門笠森 楠光院
卅八番 門音羽 清水寺
卅九番 房州 那古寺

右房州よの道すがらは日光鹿島香取其外名所旧跡最も多あるて西国よりもおとらぬ風景之

住家を棄て農業に勉め田畑山林を肥し百工に好事まして名人と呼ばるゝ商売を尚時代の流行に従ひて或は正直一ト筋に家富と成一ト芸を学ぶ迄至るまで古今の実事を集め夫々部分ありて初学の志を立る階梯に書きあらわし

女子教訓の書古昔より

彫工 佐脇庄兵衛
同 伊三郎

日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛
淺草茅町二丁目 須原屋伊八

女子教訓引
繪入全二冊　同
近刻

今ハ世ノ中ソノ風ハヤリヲ好ミ時代ニ後レサルヤウニトノミ志シテ女ノ心ヲ教訓ヲモ知ラヌ人ハ多クナリユクノミナレバ女子ハ三月カヨヒテ諸藝ノ教ヲ受ケ礼儀作法ヲ習ヒ尚時ノ人ニ交ハルヲ要トシテ古ヘノ教ヲ尚ヒ忘ルヽ至ルマデ古ヘノ風ヲ学ヒ専ラ容姿挙動ヲ風雅ニ作ルヲ要トシテ女子ノ至極ノ心得ヲ忘ルヽ事アリ

彫工　佐脇庄兵衛
同　伊三郎

文化七年庚午八月既望

東都書肆
日本橋通壹町目　須原屋茂兵衛
淺草茅町二丁目　須原屋伊八

歸厚客話　景山先生著
初編十冊　近刻

此書ハ士農工商の孝道忠義寄特正直仕ヘ家を興シ田畑山林を肥シ百工ハ好事まして名人となるの術人ハ深切を鍛錬ちる上正直ニて豪富と成シて各篤厚を積おけて一大あを成シたる古今實事を集め夫ゝ部分ニして初学の志を立る楷梯ニ書ちり

九番　若狭国　松尾寺
壱番　江州　竹生島
弐番　同　長命寺
参番　同　観音寺
四番　美濃国　谷汲寺
右谷汲寺ゟ巡礼ニ信州善光寺へ参ル加納へ出夫ゟ木曽路洗馬ゟ右へ行ちり

五番　普門　長泉院
六番　宝雲寺
七番　観音院
八番　法性寺
九番　菊水寺
十番　水潜寺
十一番　小坂下　菊水寺
十二番　ハシヤ　法性寺
十三番　鷲ノ　観音院
十四番　水クリ　水潜寺
扶桑二郡のゝにて他郡へまゐるべからず

十五番　普門　千葉寺
十六番　上総　高倉　高藏寺
十七番　門笠森　楠光院
十八番　門音羽　清水寺
十九番　房州　那吳寺
右房州ゟの道すがらは旧光鹿島香取其外名所旧跡最も多ありて西国ゟもおとらぬ風景之

高本